

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2020年6月25日
【事業年度】	第109期（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）
【会社名】	東洋埠頭株式会社
【英訳名】	TOYO WHARF & WAREHOUSE CO.,LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 原 匡史
【本店の所在の場所】	東京都中央区晴海一丁目8番8号
【電話番号】	(03)5560-2701
【事務連絡者氏名】	経理部次長 佐古 一彦
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区晴海一丁目8番8号
【電話番号】	(03)5560-2702
【事務連絡者氏名】	経理部次長 佐古 一彦
【縦覧に供する場所】	東洋埠頭株式会社 川崎支店 (川崎市川崎区扇町13番1号) 東洋埠頭株式会社 大阪支店 (大阪市此花区梅町二丁目4番72号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第105期	第106期	第107期	第108期	第109期
決算年月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月
営業収入 (百万円)	32,257	31,587	33,461	34,132	34,731
経常利益 (百万円)	1,290	1,744	1,896	1,911	1,727
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	298	1,130	959	1,251	1,252
包括利益 (百万円)	477	1,900	1,307	765	431
純資産額 (百万円)	17,361	18,874	19,792	20,171	20,217
総資産額 (百万円)	38,042	37,756	39,144	38,869	38,271
1株当たり純資産額 (円)	2,244.70	2,441.51	2,558.76	2,606.78	2,610.78
1株当たり当期純利益金額 (円)	38.68	146.67	124.54	162.48	162.56
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	45.5	49.8	50.4	51.7	52.5
自己資本利益率 (%)	1.7	6.3	5.0	6.3	6.2
株価収益率 (倍)	38.53	12.41	13.79	9.17	8.00
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	1,790	2,695	3,591	2,202	3,542
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	1,252	1,598	1,766	2,037	1,780
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	744	1,123	1,606	297	1,294
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	1,295	1,278	1,495	1,348	1,823
従業員数 (人)	711	723	730	776	824
(外、平均臨時雇用者数)	(54)	(55)	(54)	(56)	(58)

(注) 1. 営業収入には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式がないため記載していない。

3. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っている。第105期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定している。

4. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第108期の期首から適用しており、第107期以前に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっている。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第105期	第106期	第107期	第108期	第109期
決算年月	2016年 3月	2017年 3月	2018年 3月	2019年 3月	2020年 3月
営業収入 (百万円)	27,784	27,182	28,366	28,896	29,138
経常利益 (百万円)	1,502	1,603	1,652	1,764	1,363
当期純利益 (百万円)	911	1,024	787	1,178	965
資本金 (百万円)	8,260	8,260	8,260	8,260	8,260
発行済株式総数 (千株)	77,400	77,400	7,740	7,740	7,740
純資産額 (百万円)	17,736	19,019	19,725	20,132	19,957
総資産額 (百万円)	37,279	37,123	38,282	37,865	36,946
1株当たり純資産額 (円)	2,296.53	2,462.81	2,554.75	2,607.57	2,584.95
1株当たり配当額 (内1株当たり中間 配当額) (円)	5.00 (2.50)	5.00 (2.50)	27.50 (2.50)	50.00 (25.00)	50.00 (25.00)
1株当たり当期純利 益金額 (円)	118.03	132.65	101.99	152.70	125.02
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金 額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	47.6	51.2	51.5	53.2	54.0
自己資本利益率 (%)	5.1	5.6	4.1	5.9	4.8
株価収益率 (倍)	12.62	13.72	16.84	9.76	10.41
配当性向 (%)	42.4	37.7	49.0	32.7	40.0
従業員数 (外、平均臨時雇用 者数) (人)	289 (17)	289 (11)	288 (18)	287 (21)	294 (23)
株主総利回り (%)	76.2	95.1	92.4	83.7	76.8
(比較指標：配当込 みTOPIX) (%)	(89.2)	(102.3)	(118.5)	(112.5)	(101.9)
最高株価 (円)	234	200	1,980 (199)	1,774	1,545
最低株価 (円)	128	133	1,652 (165)	1,333	997

(注) 1. 営業収入には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式がないため記載していない。

3. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っている。第105期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額を算定している。

4. 第107期の1株当たり配当額27.50円は、1株当たり中間配当額2.50円と1株当たり期末配当額25.00円の合計である。2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っているため、1株当たり中間配当額2.50円は株式併合前、1株当たり期末配当額25.00円は株式併合後の金額となっている。

5. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものである。

6. 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っている。第107期の株価については株式併合後の最高・最低株価を記載し、()内に株式併合前の最高・最低株価を記載している。

7. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第108期の期首から適用しており、第107期以前に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっている。

2【沿革】

1929年5月	当社の前身である「日満倉庫株式会社」設立
1940年1月	当社設立（株式会社大東園、その後東洋埠頭商事株式会社と改称）
1945年	終戦後、日満倉庫(株)の親会社である南満洲鉄道株式会社が閉鎖機関に指定される
1946年5月	「東洋埠頭商事株式会社」が、日満倉庫(株)の全施設を賃借し全従業員を引継ぐ
1947年5月	社名を「東洋埠頭株式会社」と改称
1948年7月	閉鎖機関整理委員会の譲渡承認により、日満倉庫(株)の全資産が当社に包括譲渡される 同時に大阪、新潟、博多に支店開設
1948年9月	東永運輸(株)設立
1949年2月	川崎支店開設
1949年5月	東京証券取引所に株式を上場
1950年9月	豊洲支店開設
1958年12月	東京支店開設
1960年2月	第一陸運(株)設立
1971年10月	鹿島営業所開設（1973年支店に昇格）
1972年9月	東洋埠頭作業(株)設立（1992年鹿島東洋埠頭(株)に社名変更）
1979年9月	(株)東洋埠頭配送センター設立（1991年東洋埠頭陸運(株)に社名変更、2005年東京東洋埠頭(株)に社名 変更）
1983年6月	常盤運送(株)の株式を取得、子会社とする（1985年志布志東洋埠頭(株)に社名変更）
1983年7月	新潟支店閉鎖
1986年7月	志布志事業所（鹿児島）開設（1990年支店に昇格）
1990年10月	東扇島事業所開設（1998年支店に昇格）
1993年7月	ジューロ航空(株)の株式を取得、子会社とする（1994年(株)東洋トランスに社名変更）
1999年10月	第一陸運(株)解散
2003年1月	大井事業所開設 〇〇〇東洋トランス（モスクワ）設立
2005年7月	(株)東洋埠頭青果センター（大阪）設立
2005年8月	〇〇〇TB東洋トランス（モスクワ）設立
2010年6月	豊洲支店を川崎支店豊洲営業所へ組織変更
2020年4月	常陸那珂事業所開設（営業所から昇格）

3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、物流事業（倉庫業、港湾運送業、自動車運送業、国際運送取扱業等）及びその関連事業を行っている。当社グループの事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりである。

なお、次の2部門は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一である。

(1) 国内総合物流事業

倉庫業

倉庫施設（普通倉庫、サイロ、青果物倉庫、冷蔵倉庫等）における貨物の保管並びに入出庫作業及び荷捌き作業を主とする業務であり、当社は、倉庫業務の一部を㈱オーエスティ物流に委託している。また、倉庫業務のうち入出庫作業等の一部を鹿島東洋埠頭㈱、東京東洋埠頭㈱、㈱ティーエフ大阪等に委託している。なお、㈱東洋埠頭青果センター、志布志東洋埠頭㈱、新潟東洋埠頭㈱は倉庫業を行っており、当社は、倉庫施設を賃貸している。

港湾運送業

大型荷役機械を使用するバラ貨物の海陸一貫作業や、本船荷役作業、ターミナルでのコンテナ取扱作業などを主とする業務であり、当社は、港湾運送業務のうち荷役作業等の一部を鹿島東洋埠頭㈱、志布志東洋埠頭㈱、㈱ティーエフ大阪に委託している。なお、東光ターミナル㈱は倉庫業を行っており、当社は同社から港湾荷役作業等を請負っている。

自動車運送業

貨物自動車等による輸配送を主とする業務であり、当社は、自動車運送業務の一部を㈱オーエスティ物流、志布志東洋埠頭㈱、㈱ティーエフ大阪等に委託している。

また、東永運輸㈱は自動車運送業を行っている。

その他の業務

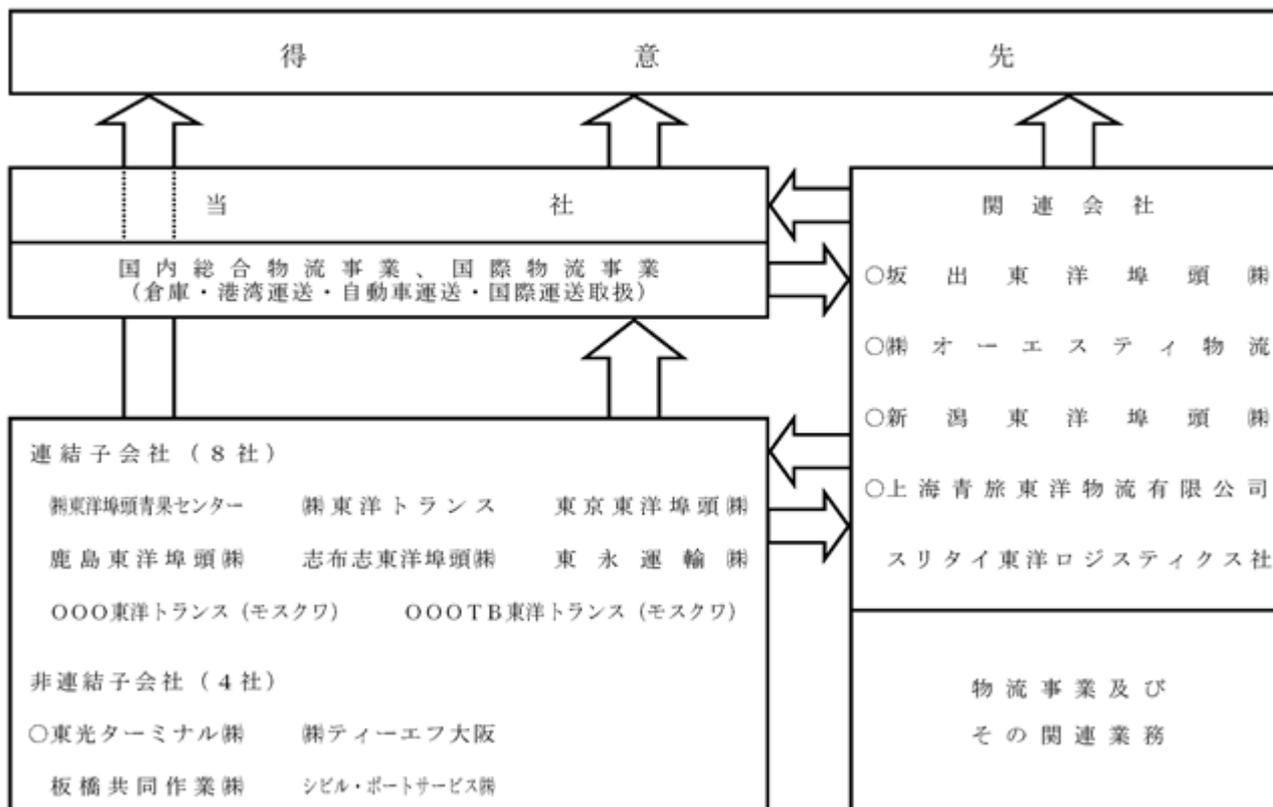
海上運送や、通関、施設賃貸や工場構内作業を主とする業務である。

なお、坂出東洋埠頭㈱は国内総合物流事業を行っている。

(2) 国際物流事業

㈱東洋トランスと、同社のロシア現地法人である〇〇〇東洋トランス、〇〇〇T B東洋トランス及び上海青旅東洋物流有限公司等による国際輸送、倉庫、通関を主とする業務である。

事業の系統図は次のとおりである。



- (注) 1. 矢印は役務の流れを示している。
 2. ○印は持分法適用会社(5社)である。

4【関係会社の状況】

会社名	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容			
					役員の兼任等	資金援助等	営業上の取引	設備の 賃貸借
(連結子会社)								
(株)東洋埠頭青果センター(注)5	大阪府大阪市此花区	100	国内総合物流事業	100.0	あり	当社は同社に対し、運転資金を貸付けている。	当社の自動車運送、貨物の保管・荷役を請負っている。	倉庫事務所の賃貸
(株)東洋トランス	東京都中央区	100	国際物流事業	100.0	〃	〃	当社は同社の貨物の運送・保管を請負っている。	事務所の賃貸
東京東洋埠頭(株)	東京都中央区	50	国内総合物流事業	100.0	〃	〃	当社の荷役を請負っている。	〃
鹿島東洋埠頭(株)	茨城県神栖市	30	〃	75.5	〃	当社は同社より、運転資金を借入れている。	当社の港湾荷役及び倉庫荷役を請負っている。	〃
志布志東洋埠頭(株)	鹿児島県志布志市	20	〃	90.0	〃	〃	当社の自動車運送、貨物の保管・荷役を請負っている。	倉庫事務所荷役機械の賃貸
東永運輸(株)	大阪府大阪市此花区	20	〃	100.0	〃	〃	なし	事務所の賃貸 土地の賃貸借
〇〇〇東洋トランス	ロシアモスクワ	1,000 (万ルーブル)	国際物流事業	100.0 (100.0)	なし	なし	〃	なし
〇〇〇TB東洋トランス	ロシアモスクワ	145 (万ルーブル)	〃	100.0 (100.0)	〃	〃	〃	〃
(持分法適用非連結子会社)								
東光ターミナル(株)	神奈川県川崎市川崎区	175	国内総合物流事業	52.0	あり	当社は同社より、運転資金を借入れている。	当社は同社の港湾荷役及び倉庫荷役を請負っている。	事務所土地の賃貸
(持分法適用関連会社)								
坂出東洋埠頭(株)	香川県坂出市	100	〃	46.5	〃	なし	なし	なし
(株)オーエスティ物流	大阪府大阪市此花区	30	〃	49.0	〃	当社は同社に対し、運転資金を貸付けている。	当社の自動車運送、貨物の保管・荷役を委託している。	〃
新潟東洋埠頭(株)	新潟県新潟市中央区	20	〃	40.0	〃	なし	なし	倉庫事務所土地の賃貸
上海青旅東洋物流有限公司	中国上海	2,070 (千元)	国際物流事業	40.0 (40.0)	〃	〃	〃	なし

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載している。
2. 上記の子会社で特定子会社に該当するものはない。
3. 上記の子会社で有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はない。
4. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数である。
5. 債務超過会社で債務超過の額は、2020年3月末時点で1,850百万円となっている。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2020年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
国内総合物流事業	675 (58)
国際物流事業	149 (-)
合計	824 (58)

(注) 従業員数は、就業人員であり、臨時雇用者数は年間の平均人員を()外数で記載している。

(2) 提出会社の状況

2020年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
294 (23)	44.1	20.2	7,145,190

(注) 1. 従業員数は、就業人員であり、臨時雇用者数は年間の平均人員を()外数で記載している。

2. 平均年間給与は、超過勤務手当及び賞与を含んでいる。

3. 当社は、国内総合物流事業の単一セグメントである。

(3) 労働組合の状況

当社グループ(当社及び連結子会社)における主たる労働組合は、東洋埠頭労働組合(1946年9月結成、所属組合員数132名)、鹿島東洋埠頭労働組合(1987年6月結成、所属組合員数84名)が組織されており、全日本倉庫運輸労働組合同盟に加盟しているほか、志布志東洋埠頭労働組合(1992年12月結成、所属組合員数98名)が組織されている。

なお、特記すべき紛争事項はない。

第2【事業の状況】

当社グループ（当社及び連結子会社）の消費税等の会計処理は、税抜方式によっているため、この項の営業収入等の記載には、消費税等は含まれていない。

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1)経営方針

当社グループは、株主・お客様・協会社・従業員・地域社会などすべての関係者に対し、健全で価値のある企業として持続的に発展した姿を目指すことを経営方針としている。

(2)経営戦略等

当社グループは、2028年度に創業100周年を迎えるにあたり、あるべき姿として、

「得意な事業を展開し、独自性を発揮する」

「既存事業継続、国際物流拡大、新規基幹事業稼働、により持続的な成長を実現する」

「働きやすい職場環境（施設・体制・働き方改革）を確立する」

「事業を通じた社会貢献を推進する」

「グループ売上高500億円を達成する」

と設定した。

これに基づき、2020年度～2022年度の経営三カ年計画（Fly to the Next 2022）は、経営基盤を強化することに注力して、次の具体的な取り組みを推進する。

国内外の新たな物流サービスの確立など、新たな収益の柱となる新規業務を本格稼働する。

国内総合物流事業では、お客様に最適な物流提案を積極的に行い取扱数量の増加を図る。また、国際物流事業では、ロシアを中心としたカザフスタンやベラルーシなどの周辺国での営業活動を強化し、取扱数量の増加を図るとともに、ロシア、上海、バンコクなど、当社グループの海外拠点間のネットワークを強化して、業務の拡大を図る。

災害に強く、お客様に効率化などの付加価値を提供できる施設・設備に積極的に投資する。

当期は、東扇島支店における環境に配慮した荷役機器の導入やロシアでの倉庫面積の拡大などを進めた。次期は、危険品倉庫や自動ラックの設置など、特色ある施設・設備への投資を推進し、お客様に物流の効率化、省力化など、物流コスト低減を実現する最適な物流サービスを提供することを目指す。また、単なる更新にとどまらない、災害に強い、施設・設備の強化を図る。

業務、システム、制度など社内の体制を改革し、より強固で効率的なものとする。

抜本的な業務の標準化・効率化を進め、システムの再構築を図る。また、物流業界での深刻な人材不足の状況に対応するため、積極的な求人活動を行うとともに、社内人事制度の改革を図り、人材の育成を図るとともに、安全衛生活動の強化、労働時間短縮などの働き方の見直しなど、安全で働きやすい職場環境作りを推進する。

(3)経営環境

日本経済は、米中の貿易摩擦や新型コロナウイルス感染症拡大の予測が難しいこと等により、不透明な状況が続くことが見込まれる。

埠頭・倉庫を含めた物流業界は、急激な経済の悪化により、従前よりさらに厳しい経営環境が続く見通しである。

(4)優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当社グループは、上記経営環境を踏まえつつ、経営戦略を推進させるために、2020年4月より次の項目を着手している。

鹿島支店常陸那珂営業所を事業所化し、独立した組織として統制を強化するとともに、同地区における取扱数量のさらなる拡大を図る。

安全・品質管理部を新設し、労働災害の撲滅、物流品質のさらなる向上を図る。

経営三カ年計画の着実な推進を図るため、各種プロジェクトを立ち上げ、機動的かつ迅速な改革の進捗を図る。

経営三カ年計画期間において、総額230億円の関連投資を進める。

(5)経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループの経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標として、経営三カ年計画では、最終年度である2023年3月期の連結業績目標を、営業収入400億円、営業利益14億円、親会社株主に帰属する当期純利益9億円とした。

また、2021年3月期の連結業績目標は、営業収入340億円、営業利益14億円、経常利益16億円、親会社株主に帰属する当期純利益10億円である。

なお、新型コロナウイルス感染症（以下、本感染症）は、国内外の経済、企業活動に広範な影響を与える事象であり、本感染症拡大の収束時期や影響の程度を予測することは困難であるが、外部の情報源や当社グループ各拠点の稼働状況等を踏まえて、今後、2021年3月期通期において当該影響が継続するものと仮定し、局所的な荷動きの低迷等を考慮した指標である。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがある。

なお、将来に関する事項については、当連結会計年度末現在において当社グループ（当社及び連結子会社）が判断したものである。

事業環境の変動

当社グループは、総合物流企業集団として国内各地及びロシア、タイ、中国に物流拠点を有し、多様な物流事業（倉庫業、港湾運送業、自動車運送業、国際物流事業、その他付帯事業等）を展開している。当社グループの事業は、国内外の経済・政治情勢、IT技術等の進展による物流の変化、また、顧客の物流合理化に伴う競争の激化等が、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。現在、顧客ニーズに対応した物流提案を行うとともに、適時適切な設備投資を行い、また、IT技術の導入等を推進し、営業の拡大と経営基盤の強化を図っている。

物流施設の災害による被災

当社グループの主たる事業においては、物流施設が重要な資産である。これらの施設は、国内各地及びロシア、タイ、中国に立地している。これらの地域で大規模災害が発生した場合は、当社グループの物流施設に甚大な被害が発生し、経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。ここ数年来の大型台風による施設の被害を一部で受けたことから、今後の大規模災害等による施設被害に備えるため、計画的に老朽施設の更新投資や補強のための投資等を行っている。

新型コロナウイルス感染症の拡大

当社グループは、国内外において多様な物流事業を展開している。新型コロナウイルス感染症の拡大により、顧客の生産、原料調達、販売等に係る物流が大きく変化した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。また、当社グループ及び協力会社等で新型コロナウイルス感染者が多数発生した場合、当該発生拠点の物流等の業務が一定期間停止し、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。当社グループとしては、経営の多角化を図るとともに、在宅勤務、時差出勤、分散休憩、飛沫防止対策等の感染予防対策を講じて実施している。また、仮に感染者が発生した場合には、消毒の実施、代替要員の確保など、協力会社を含め、物流事業を継続するための取り組みを構築している。

資金調達及び金利変動

当社グループは、必要資金を主に金融機関からの借入れにより調達している。現在当社グループは、設備投資資金の調達や運転資金等の借換えに支障をきたす状況にはなく、借入金利も安定した状況にあるが、予想外の社会・経済変動により金融市場が逼迫し、資金の調達、金利面に急激な変化が生じた場合は、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性がある。

株価の変動

当社グループの保有する時価のある株式は、当連結会計年度末現在、取得原価で29億5千4百万円、貸借対照表計上額（時価）で37億8千3百万円であり、評価差額は8億2千8百万円の評価益となっているが、今後の経済情勢または発行会社の経営状態の急激な変動等による株価の大幅な下落が生じた場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。

顧客等に対する信用リスク

当社グループは、顧客及び関係先に対して営業未収入金・貸付金等の債権を保有すること等により信用を供与している。この債権の回収については、最大の注意を払い、必要に応じて督促・貨物の留置等の対策を講じているが、主要な顧客及び関係先が財務上の問題に直面した場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。

訴訟・係争等

当社グループは、法令遵守に努めながら事業活動を行っているが、事業活動に関して様々な形で訴訟等の対象となる可能性があり、その結果によっては当社グループの業績及び財務状態に影響を及ぼす可能性がある。

固定資産の減損

当社グループは、建物及び土地をはじめとする多額の固定資産を保有しており、今後の経済変動等による固定資産の時価下落、及び資産グループの収益力の低下等に伴い、減損損失が発生する可能性がある。

繰延税金資産

当社グループの当連結会計年度末における繰延税金資産の計上額は、評価性引当額（回収可能性がないと判断されたもの）を除き、14億8千9百万円である。今後、グループ各社の将来所得の発生見込額の減少等に伴い、多額の評価性引当額が発生する可能性がある。

退職給付債務

当社は、2007年4月から退職一時金の一部を確定拠出年金に移行したが、その他の退職給付債務については、割引率、昇給率等の見積もり数値を用いて計算されており、その変動に伴い変動する。

また、当社グループは、退職給付信託を設定しており、その信託財産は、主に信託設定時に当社が拠出した株式により占められている。このため、想定外の株価変動により発生する数理計算上の差異の費用処理等が発生した場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性がある。

投資の減損等

当社グループの保有する時価のない有価証券の当連結会計年度末における貸借対照表計上額は、4億2千5百万円であり、これらは発行会社の財政状態の悪化による実質価値の著しい低下に伴い、減損処理の対象となる可能性がある。

また、当社グループの保有する非連結子会社及び関連会社株式の当連結会計年度末における貸借対照表計上額は5億2千5百万円である。これらの株式の帳簿価額は、当該子会社及び関連会社の経営成績または財政状態の悪化に伴い、減額の対象となる可能性がある。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1)経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績」という。）の状況の概要は次のとおりである。

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度における日本経済は、長期化する米中貿易摩擦、海外経済の減速などを背景に輸出や生産に弱さがみられ、消費税率引き上げに伴い個人消費が低調となったことに加え、年度末には新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、先行きが不透明で不安定な状況となった。

埠頭・倉庫業界においては、人手不足に伴い人件費や作業費などのコストが増加し、厳しい経営環境が継続した。

このような経営環境の中、当社グループでは、グループ各社の連携を一層強化し、営業の拡大、経営基盤の強化、社会的責任の向上に取り組んできた。

国内総合物流事業では、国内貨物やコンテナターミナルの取扱数量が増加し、また、倉庫保管残高も前期を上回った。国際物流事業では、ロシア国内での貨物取扱いが増加した。この結果、営業収入は前期を上回ったが、人件費、作業費、運送費などが増加して収益を圧迫したことにより、営業利益は前期を下回った。しかし、為替差損益の改善や持分法による投資利益の計上などにより、親会社株主に帰属する当期純利益は前期並みとなった。

この結果、当連結会計年度の財政状態及び経営成績は以下のとおりとなった。

a．財政状態

当連結会計年度末の資産合計は、前連結会計年度末に比べ5億9千8百万円減少し、382億7千1百万円となった。当連結会計年度末の負債合計は、前連結会計年度末に比べ6億4千4百万円減少し、180億5千4百万円となった。当連結会計年度末の純資産合計は、前連結会計年度末に比べ4千5百万円増加し、202億1千7百万円となった。

b．経営成績

当連結会計年度の営業収入は347億3千1百万円（前期比5億9千8百万円、1.8%の増収）、営業利益は14億5千7百万円（前期比2億6千7百万円、15.5%の減益）、経常利益は17億2千7百万円（前期比1億8千4百万円、9.6%の減益）、親会社株主に帰属する当期純利益は12億5千2百万円（前期並み）となった。

なお、新型コロナウイルス感染症拡大による当連結会計年度への業績の影響については、国内総合物流事業、国際物流事業ともに軽微であった。

セグメントの経営成績は次のとおりである。

*以下の営業収入及び営業利益は、セグメント間の取引を含んでいる。

国内総合物流事業

国内総合物流事業の営業収入は、315億1千9百万円、前期比0.8%の増収、営業利益は、13億8百万円、前期比18.1%の減益となった。国内貨物の倉庫保管残高や、コンテナターミナルでの取扱数量の増加により営業収入は前期を上回った。しかし、人件費や作業費、運送費などが増加したことにより収益は圧迫され、営業利益は、前期を下回った。

倉庫業

倉庫業の営業収入は、106億6千4百万円、前期比2.9%の増収となった。

平均保管残高は、30万トン（前期29万トン）、入出庫数量は、363万トン（前期362万トン）であった。普通倉庫貨物は、バナナなど輸入青果物の取扱いは減少したが、食品類、紙や穀物などの取扱いが増加した。冷蔵倉庫貨物は、堅調に推移した。

港湾運送業

港湾運送業の営業収入は、78億6千万円、前期比0.5%の減収となった。

ばら積み貨物の取扱数量は、487万トン（前期495万トン）であった。穀物類の取扱いは増加したが、石炭、残土の取扱いが減少した。

コンテナ取扱数量は、261千T E U（前期243千T E U）であった。川崎港での取扱いが大きく増加した。

自動車運送業

自動車運送業の営業収入は、59億7千5百万円、前期比0.1%の増収となった。取扱いが堅調に推移した。

その他の業務

その他の業務の営業収入は、70億1千8百万円、前期比0.4%の減収となった。物流関連施設の賃貸収入は増加したが、工場構内作業の収入が減少した。

国際物流事業

国際物流事業の営業収入は、35億3百万円、前期比11.9%の増収、営業利益は、1億3千8百万円、前期比18.9%の増益となった。ロシアでの倉庫事業拡大に伴い、取扱いが増加した。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度の現金及び現金同等物の期末残高は、前連結会計年度末より4億7千4百万円増加し、18億2千3百万円となった。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、法人税等の支払額が減少したことや保険金の受取額などがあったことにより、前連結会計年度に比べ13億3千9百万円増加し、35億4千2百万円となった。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、17億8千万円の純支出となった。固定資産の取得による支出が減少したことなどにより、前連結会計年度に比べ2億5千7百万円純支出が減少した。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、12億9千4百万円の純支出となった。長期借入れによる収入が減少したことなどにより、前連結会計年度に比べ9億9千7百万円純支出が増加した。

生産、受注及び販売の実績

当社グループ(当社及び連結子会社)は、役務の提供を主体とする総合物流業者であり、生産、受注及び販売の実績を区分して把握することは困難であるため、これに代えてセグメント別業務別の営業収入及び取扱数量を記載している。

a. セグメント別業務別営業収入

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

セグメント名	業務の名称	営業収入	
		金額(百万円)	前年同期比(%)
国内総合物流事業	倉庫業	10,664	102.9
	港湾運送業	7,860	99.5
	自動車運送業	5,975	100.1
	その他の業務	7,018	99.6
	計	31,519	100.8
国際物流事業	国際運送取扱業	3,503	111.9
合計		35,022	101.8

(注) 上記の金額には、セグメント間の取引が含まれている。

b. セグメント別業務別取扱数量

国内総合物流事業

1) 倉庫業

(イ) 倉庫入出庫残高及び回転率

項目		期首残高	入庫	出庫	期末残高	回転率(%)
		数量 (千トン)	数量 (千トン)	数量 (千トン)	数量 (千トン)	数量
倉庫	前連結会計年度 (2018年4月1日～ 2019年3月31日)	262	1,695	1,682	275	51.7
	当連結会計年度 (2019年4月1日～ 2020年3月31日)	275	1,674	1,664	285	48.9
サイロ	前連結会計年度 (2018年4月1日～ 2019年3月31日)	17	126	123	21	49.4
	当連結会計年度 (2019年4月1日～ 2020年3月31日)	21	149	144	26	53.0

(注) 貨物回転率は貨物荷動きの状況を示すものであって、下記の算式によって算定される。

$$\text{回転率} = \frac{\text{年間入出庫高}}{\text{前月末残高及び当月末残高の年間累計}} \times 100$$

(ロ) 倉庫品目別保管残高

品目	前連結会計年度 (2019年3月31日現在)		当連結会計年度 (2020年3月31日現在)	
	保管数量		保管数量	
	千トン	比率(%)	千トン	比率(%)
倉庫				
農水産品	63	23.0	62	21.7
金属	6	2.4	6	2.4
金属製品・機械	14	5.4	12	4.4
窯業品	0	0.2	3	1.2
その他の化学工業品	82	29.9	94	33.1
紙・パルプ	27	9.8	33	11.6
食料工業品	20	7.3	23	8.3
雑工業品	1	0.5	0	0.2
雑品	59	21.5	49	17.1
計	275	100.0	285	100.0
サイロ				
農水産品	16	78.4	20	79.1
雑品	4	21.6	5	20.9
計	21	100.0	26	100.0

2) 港湾運送業
(イ) 一般貨物

作業別	前連結会計年度 (2018年4月1日～2019年3月31日)	当連結会計年度 (2019年4月1日～2020年3月31日)
搬入		
本船揚(千トン)	1,780	1,585
舢舨(千トン)	16	4
車卸(千トン)	256	172
計(千トン)	2,053	1,763
搬出		
本船積(千トン)	681	606
舢舨積(千トン)	-	-
車積(千トン)	634	617
計(千トン)	1,316	1,223
搬入、搬出を伴わない作業 (千トン)	3,627	3,763
合計(千トン)	6,997	6,750

(ロ) コンテナ

作業別	前連結会計年度 (2018年4月1日～2019年3月31日)	当連結会計年度 (2019年4月1日～2020年3月31日)
取扱数量(TEU)	243,994	261,728

(注) TEU: 20フィートコンテナ換算

3) 自動車運送業

扱別	前連結会計年度 (2018年4月1日～2019年3月31日)	当連結会計年度 (2019年4月1日～2020年3月31日)
輸送数量(千トン)	1,708	1,721

(2)経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりである。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものである。

財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

a. 経営成績等

1) 財政状態の分析

(資産)

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末に比べ5億9千8百万円減少し、382億7千1百万円となった。投資有価証券や有形固定資産の減少などに伴い、前連結会計年度末に比べ固定資産が12億3千2百万円減少した。

(負債)

負債は、前連結会計年度末に比べ6億4千4百万円減少し、180億5千4百万円となった。長期借入金や設備関係支払手形などが減少した。

(純資産)

純資産は、前連結会計年度末に比べ4千5百万円増加し、202億1千7百万円となった。その他有価証券評価差額金が7億6千6百万円減少したが、利益剰余金が8億6千6百万円増加した。

この結果、自己資本比率は52.5%で前連結会計年度末比0.8ポイント上昇した。

2) 経営成績の分析

(イ) 営業収入

当連結会計年度における営業収入は、347億3千1百万円（前連結会計年度対比5億9千8百万円の増収）となった。なおセグメント別営業収入の概要については、「(1)経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」に記載している。

(ロ) 営業原価

当連結会計年度における営業原価は、313億9千7百万円（前連結会計年度対比7億1千8百万円の増加）となった。この結果、営業原価の営業収入に対する比率は90.4%となり、前連結会計年度の89.9%と比較して0.5ポイント上昇した。

(ハ) 販売費及び一般管理費

当連結会計年度における販売費及び一般管理費は、18億7千6百万円（前連結会計年度対比1億4千7百万円の増加）となった。

(ニ) 営業外損益

当連結会計年度における営業外収益は、3億9千万円（前連結会計年度対比3百万円の減少）となった。

営業外費用は1億2千万円（前連結会計年度対比8千6百万円の減少）となった。

金融収支は前連結会計年度より3千2百万円改善し、6千4百万円の黒字となった。

(ホ) 特別損益

当連結会計年度における特別利益は、受取保険金5億1千7百万円、受取補償金1億6千6百万円、固定資産売却益4百万円を計上した。一方、特別損失は、火災による損失3億5千4百万円、固定資産除却損2億7千3百万円を計上した。

b. 経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループは、経営三カ年計画として2018年3月期から2020年3月期までの3年間の経営三カ年計画を策定し、最終年度である2020年3月期連結業績目標を、営業収入360億円、営業利益20億円、親会社株主に帰属する当期純利益13億円とした。

当連結会計年度における日本経済は、長期化する米中貿易摩擦、海外経済の減速などを背景に輸出や生産に弱さがみられ、消費税率引き上げに伴い個人消費が低調となったことに加え、年度末には新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、先行きが不透明で不安定な状況となった。

埠頭・倉庫業界においては、人手不足に伴い人件費や作業費などのコストが増加し、厳しい経営環境が継続した。

このような経営環境の中、経営三カ年計画策定時掲げた連結業績の目標に対し、営業収入96.5%、営業利益72.9%、親会社株主に帰属する当期純利益96.3%の達成率となった。

なお、各科目の増減に関する認識及び分析・検討内容については、「(1)経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」に記載している。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

a．キャッシュ・フローの分析・検討内容

当社グループの当連結会計年度における営業活動によるキャッシュ・フローは、法人税等の支払額が減少したことや保険金の受取額などがあったことにより、前連結会計年度に比べ13億3千9百万円増加し、35億4千2百万円となった。

なお、当連結会計年度における投資活動・財務活動によるキャッシュ・フローの概要については、「(1)経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載している。

b．資本の財源及び資金の流動性

1)資本構成

当社グループの当連結会計年度末における資本構成は、その他の包括利益累計額を含めた自己資本が201億9百万円（前連結会計年度末対比3千万円の増加）で総資産に対する比率は52.5%、借入金が98億1千1百万円（前連結会計年度末対比8億7千1百万円の減少）同25.6%となっており、前連結会計年度末と比較して自己資本比率が0.8ポイント上昇し、借入金の比率は1.9ポイント低下している。自己資本比率の上昇は、既存固定資産の経年減等に伴う総資産の減少等によるものである。また、総資産借入金比率の低下は、借入金残高が減少したことと、総資産が減少したことによるものである。

2)資金の流動性

当社グループの当連結会計年度末における流動比率は63.9%で、前連結会計年度末における60.4%と比べ3.5ポイント上昇した。

連結会計年度の売上債権の平均滞留期間は1.4ヶ月で前連結会計年度と変わりなく、回収はおおむね順調であった。

3)財政政策

当社グループは現在、運転資金及び設備資金を内部資金及び借入により調達している。運転資金の借入については、当社が一括して金融機関等から短期借入により調達し、関係会社の資金需要に応じて貸し付ける方法をとっている。設備資金については、金融収支の安定性を重視し、金融機関から長期固定金利の借入により調達している。

なお、経営三カ年計画（2020年度～2022年度）期間において投資する約230億円は、自己資金及び金融機関からの借入金にて調達する方針である。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されている。

連結財務諸表の作成にあたり、期末時点の状況をもとに、種々の見積りと仮定を行っているが、それらは連結財務諸表、偶発債務に影響を及ぼしている。連結財務諸表に与える影響が大きいと考えられる項目・事象は以下のとおりである。

なお、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う影響については、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 (5)経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等」に記載した仮定のもと、固定資産の減損判定や繰延税金資産の回収可能性などの会計上の見積りを実施したが、連結財務諸表に与える影響は軽微である。

a．投資の減損

当社グループは、長期的な資金の運用または長期的な取引関係の維持等のために、金融機関を含む取引先の株式等に対する投資を行っている。これらの投資には時価のある価格変動性の高い上場会社の株式と、時価の算定が困難な非上場会社の株式等が含まれており、当社グループはこれらの株式等の投資価値の低下が一時的でないものと判断した場合に減損処理を行うこととしている。当連結会計年度において計上した減損処理額はなく、当連結会計年度末において保有する上場会社の株式に係る未実現損失の額は2億9千7百万円である。

b．固定資産の減価償却等

当社グループの主な事業である埠頭業・倉庫業は施設に多額の投資を行う必要があり、有形固定資産及び無形固定資産の当連結会計年度末における帳簿価額は241億3千3百万円で総資産額の63.1%、営業収入の額の69.5%に相当している。当社グループは、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降取得した建物附属設備及び構築物を除く有形固定資産の減価償却方法について定率法を採用し、投資資金の早期回収を図っている。当連結会計年度における減価償却費の計上額は16億7千4百万円であり、これは減価償却の対象となる固定資産の当連結会計年度末における帳簿価額の10.7%に相当している。

c. 退職給付に係る会計処理

当社グループは、退職給付費用及び債務の計算の前提となる割引率を、退職給付の支払見込期間を反映したA格以上の普通社債の連結会計年度末における市場利回りを勘案して設定している。

当社グループの数理計算上の差異の主な発生原因は、退職給付信託の設定に伴い当社が抛出した株式の想定外の価格変動及び割引率の変更によるものであり、その処理方法は発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法によっている。当連結会計年度末における数理計算上の差異の未認識額は5億3千9百万円（借方残高）である。

制度移行に伴う過去勤務費用の処理方法は、数理計算上の差異の処理方法に準じて、発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法によることとしている。当連結会計年度末における過去勤務費用の未認識額は6百万円（貸方残高）である。

d. 繰延税金資産

当社グループの税効果会計の適用に際しては、グループ各社の所得の過去の発生状況及び将来の発生見込に基づくスケジュールリングの結果等を勘案して繰延税金資産の回収可能性の判定を行っている。当社グループにおいては、スケジュールリング不能のもの、所得の発生見込みに不確実性の存する一部の連結子会社に係るもの等を除き回収可能であると判断している。

また、連結納税制度を採用しており、これに沿った会計処理を行っている。

4【経営上の重要な契約等】

該当事項なし。

5【研究開発活動】

該当事項なし。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループ（当社及び連結子会社）は、得意先の満足度の高い物流サービスを提供するとともに、経営基盤の拡充を図るため、当連結会計年度において1,617百万円（金額には無形固定資産を含み消費税等を含まない。）の設備投資を実施した。その内訳は、次のとおりである。

国内総合物流事業	1,609百万円
国際物流事業	8

以上のうち当連結会計年度中に取得・完成した主なものは、提出会社川崎支店における大型荷役機械の制御盤（国内総合物流事業）、提出会社大井事業所における定温倉庫冷凍設備（国内総合物流事業）、提出会社東扇島支店におけるコンテナ貨物用の省エネ型荷役機器（国内総合物流事業）である。

また、所要資金は自己資金及び金融機関からの借入金によっている。

2【主要な設備の状況】

当社グループ（当社及び連結子会社）における主要な設備は、以下のとおりである。

(1) 提出会社

2020年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）							土地面積 (㎡)	従業員数 (人)
			建物及 び構築 物	機械及 び装置	船舶及 び車両 運搬具	土地	リース 資産	その他	合計		
本社 (東京都中央区他)	国内総合物流 事業	普通倉庫・ 事務所・ 社宅等	328	1	-	566	8	10	915	23,307 (6,503) <5,160>	52
東京支店 (東京都江東区他)	"	普通倉庫・ 上屋	814	60	1	470	-	5	1,352	26,847 (9,000)	33
川崎支店 (神奈川県川崎市川崎区 他)	"	バラ物埠頭 設備 穀物サイロ 普通倉庫及び 大豆撰別設備 青果物倉庫・ 棧橋及び青果 物流通加工施設	5,267	986	1	94	38	25	6,414	166,276 (64,300) <39,359>	97
大井事業所 (東京都大田区)	"	普通倉庫	1,274	299	-	-	10	7	1,591	(13,841)	8
東扇島支店 (神奈川県川崎市川崎区 他)	"	普通倉庫・ 冷蔵倉庫	1,351	496	4	2,328	9	14	4,203	25,111 (1,442)	43
大阪支店 (大阪府大阪市此花区他)	"	上屋・棧橋・ 野積倉庫・ 普通倉庫・ 青果物倉庫・ 液体化学品貯 蔵タンク等	1,176	296	12	1,068	-	11	2,565	13,285 (67,547) <1,564>	24
博多支店 (福岡県福岡市博多区他)	"	普通倉庫・ 輸入青果物 配送センター	1,336	13	0	1,662	-	1	3,013	13,524 (14,760) <13,524>	10
鹿島支店 (茨城県神栖市他)	"	普通倉庫・ 大豆撰別設備	1,128	181	0	1,685	-	4	2,999	79,154 (20,000)	17
志布志支店 (鹿児島県志布志市)	"	普通倉庫・ コンテナ荷捌 用設備	651	207	-	604	-	4	1,467	58,634	10

(注) 1. 土地面積の()内面積は外数で借用分を示し、< >内は内数で賃貸分を示している。

- 上記のうち、大阪支店の青果物倉庫は(株)東洋埠頭青果センターに、志布志支店の普通倉庫、コンテナ荷役用設備は志布志東洋埠頭(株)にそれぞれ賃貸している。
- 上記以外の主なものとして、事務機器、ソフトウェア、車両等の一部をリース（賃借）している。（年間リース料39百万円、リース契約期間は主に5年。）
- その他の有形固定資産には建設仮勘定は含まれていない。

(2) 国内連結子会社

2020年3月31日現在

会社名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)							土地面積 (㎡)	従業員数 (人)
			建物及 び構築物	機械及 び装置	船舶及 び車両 運搬具	土地	リース 資産	その他	合計		
㈱東洋埠頭青果センター (大阪府大阪市此花区他)	国内総合物流 事業	上屋・青果物 倉庫	0	0	-	-	-	0	0	(44,469)	21
鹿島東洋埠頭㈱ (茨城県神栖市他)	"	荷役用機械・ 車両等	0	30	36	-	-	2	69	-	107
志布志東洋埠頭㈱ (鹿児島県志布志市他)	"	普通倉庫・運 送用車両・荷 役用機械・車 両等	30	65	35	78	-	6	216	2,077 (6,941)	151
東永運輸㈱ (大阪府大阪市此花区他)	"	運送用車両等	0	-	7	6	0	0	15	360	26

(注) 1. 土地面積の()内面積は外数で借用分を示している。
 2. その他の有形固定資産には、建設仮勘定は含まれていない。

(3) 在外連結子会社

該当事項なし。

3【主要な設備能力】

(1) 提出会社の主要設備能力

主な倉庫業用設備

事業所名	普通倉庫			サイロ	冷蔵倉庫	野積倉庫
	所有庫 (うち定温 庫) (㎡)	借庫 (うち定温 庫) (㎡)	合計 (うち定温 庫) (㎡)	所有庫 (㎡)	所有庫 (㎡)	所有庫 (㎡)
東京支店	31,215 (2,978)	25,779 (4,297)	56,994 (7,275)	-	-	-
川崎支店 <うち青果物倉庫>	25,629 (2,585) <22,000>	-	25,629 (2,585) <22,000>	236,967	-	-
大井事業所	21,654 (15,648)	-	21,654 (15,648)	-	-	-
東扇島支店	35,509 (2,627)	20,297	55,806 (2,627)	-	63,317	-
東扇島支店 大黒埠頭営業所	4,184	-	4,184	-	-	-
大阪支店	30,556 (19,565)	-	30,556 (19,565)	-	-	2,138
大阪支店 東大阪営業所	-	9,035 (3,170)	9,035 (3,170)	-	-	-
博多支店	10,244 (4,912)	1,484	11,728 (4,912)	-	-	-
鹿島支店	26,777 (11,945)	-	26,777 (11,945)	312	-	-
鹿島支店 常陸那珂営業所	12,661 (2,985)	-	12,661 (2,985)	-	-	6,334
志布志支店	13,581 (660)	-	13,581 (660)	-	-	-
合計	212,010 (63,905)	56,595 (7,467)	268,605 (71,372)	237,279	63,317	8,472

主な港湾運送業用設備

事業所名	荷捌場 (㎡)	荷役機械 (荷役能力)	栈橋 (m)
川崎支店	貯鉱場 22,841	パラ物用移動式橋型起重機 3 機 (毎時500トン× 1 機、800トン× 2 機) コンテナ荷役用リーチスタッカー 1 台	656
東扇島支店	-	コンテナ荷役用リーチスタッカー 3 台、トランスファーク レーン 1 台、トップリフター 1 台	-
志布志支店	-	コンテナ荷役用リーチスタッカー 3 台、トランスファーク レーン 2 台	-

主な自動車運送業用設備
該当事項なし。

主な国際運送取扱業用設備
該当事項なし。

(2) 国内連結子会社の主要設備能力

会社名	設備の種類	関係業務の名称	設備能力
(株)東洋埠頭青果センター	倉庫・上屋	倉庫業・港湾運送業	借庫2,024㎡ 上屋20,365㎡(大阪市より賃借)
鹿島東洋埠頭(株)	荷役用機械・車両	港湾運送業・一般貨物荷役業	倉庫荷役用フォークリフト45台・ 船内荷役用ショベルローダー等12機 曳船1隻
志布志東洋埠頭(株)	荷役用機械・車両	倉庫業・港湾運送業・一般貨物荷役業	倉庫荷役用フォークリフト27台・ 船内荷役用ショベルローダー等20機
	運送用車両	自動車運送業	運送用車両7台(積載トン数80トン) トレーラー6台 シャーシ25本
	倉庫	倉庫業	所有庫3,579㎡、借庫3,200㎡
東永運輸(株)	運送用車両	自動車運送業	運送用車両26台(積載トン数258トン) トレーラー4台 シャーシ4本(うちリース3本)

(3) 在外連結子会社の主要設備能力

会社名	設備の種類	関係業務の名称	設備能力
〇〇〇東洋トランス	倉庫	国際運送取扱業	借庫27,695㎡

4【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等
該当事項なし。

(2) 重要な設備の除却等
該当事項なし。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	25,830,000
計	25,830,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2020年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2020年6月25日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	7,740,000	7,740,000	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数は 100株である。
計	7,740,000	7,740,000	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし。

【ライツプランの内容】

該当事項なし。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項なし。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高(百万円)
2017年10月1日	69,660,000	7,740,000	-	8,260	-	4,276

(注) 2017年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っている。

(5)【所有者別状況】

2020年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数 100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び地 方公共団体	金融機関	金融商品取 引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	26	25	88	49	-	4,822	5,010	-
所有株式数 (単元)	-	32,013	1,236	10,593	2,536	-	30,753	77,131	26,900
所有株式数の 割合(%)	-	41.51	1.60	13.73	3.29	-	39.87	100.00	-

(注) 1. 自己株式19,503株は、「個人その他」に195単元、「単元未満株式の状況」に3株を含めて記載している。

2. 「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が2単元含まれている。

(6)【大株主の状況】

2020年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
第一生命保険株式会社	東京都千代田区有楽町一丁目13番1号	669	8.66
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社	東京都中央区晴海一丁目8番11号	488	6.32
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	342	4.44
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町一丁目5番5号	342	4.44
日本マスタートラスト信託銀行株式会社	東京都港区浜松町二丁目11番3号	285	3.70
朝日生命保険相互会社	東京都千代田区大手町二丁目6番1号	266	3.45
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目2番1号	215	2.78
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号	207	2.69
太陽生命保険株式会社	東京都中央区日本橋二丁目7番1号	200	2.59
山内 正義	千葉県浦安市	170	2.20
計	-	3,188	41.30

(注)1. 上記発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)は、小数点第3位を切り捨てて記載している。

2. 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は471千株である。

3. 日本マスタートラスト信託銀行株式会社の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は285千株である。

4. 2016年10月21日付で公衆の縦覧に供されている大量保有に関する変更報告書において、株式会社みずほ銀行及びその共同保有者であるアセットマネジメントOne株式会社が2016年10月14日現在で4,988千株(株券等保有割合6.44%)を保有している旨の記載がされているものの、株式会社みずほ銀行の保有株式分以外については、当社として2020年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができないので、上記大株主の状況には含めていない。

なお、その大量保有に関する変更報告書の内容は以下のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	株券等保有割合 (%)
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町一丁目5番5号	3,428,000	4.43
アセットマネジメントOne株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目8番2号	1,560,000	2.02

5. 2017年3月21日付で公衆の縦覧に供されている大量保有に関する変更報告書において、株式会社三菱UFJ銀行及びその共同保有者2名が2017年3月13日現在で4,823千株(株券等保有割合6.23%)を保有している旨の記載がされているものの、株式会社三菱UFJ銀行の保有株式分以外については、当社として2020年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができないので、上記大株主の状況には含めていない。

なお、その大量保有に関する変更報告書の内容は以下のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	株券等保有割合 (%)
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	3,428,000	4.43
三菱UFJ信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号	1,245,000	1.61
三菱UFJ国際投信株式会社	東京都千代田区有楽町一丁目12番1号	150,000	0.19

(7)【議決権の状況】

【発行済株式】

2020年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 58,400	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 7,654,700	76,547	-
単元未満株式	普通株式 26,900	-	1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	7,740,000	-	-
総株主の議決権	-	76,547	-

(注) 「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が200株含まれている。
また、「議決権の数」の欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数2個が含まれている。

【自己株式等】

2020年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
東洋埠頭株式会社	東京都中央区晴海一丁目8番8号	19,500	-	19,500	0.25
坂出東洋埠頭株式会社	香川県坂出市入船町一丁目6番18号	38,900	-	38,900	0.50
計	-	58,400	-	58,400	0.75

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	191	266,585
当期間における取得自己株式	69	85,056

(注) 当期間における取得自己株式には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取請求による株式は含まれていない。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (単元未満株式の買増請求による買増し)	-	-	-	-
保有自己株式数	19,503	-	19,572	-

(注) 1. 当期間における処理自己株式には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買増請求による株式は含まれていない。

2. 当期間における保有自己株式数には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取請求及び買増請求による株式は含まれていない。

3【配当政策】

当社の主たる事業である埠頭業、倉庫業は、施設に多額の投資を必要とし、その回収は長期にわたらざるを得ない。これらの設備投資は長期的観点から計画的かつ持続的に実施することが必要であり、このことにより安定的な経営基盤が確保されるものと考えている。

当社は、株主に対する利益還元を経営の重要政策の一つとして位置づけており、利益の配分にあたっては、前述のような事業の性格を踏まえ、長期にわたり収益の安定的な確保に努めるとともに、財務体質を強化し、安定的配当を行うことを基本方針としている。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としている。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会である。

当事業年度の配当については、以上の方針に基づき、中間配当として1株当たり25円、期末配当については1株当たり25円とし、年間50円とした。

内部留保資金は、主として設備投資資金に充当している。

当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日の最終の株主名簿等に記載または記録された株主または登録株式質権者に対し、中間配当を行うことができる。」旨定款に定めている。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりである。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
2019年10月31日 取締役会決議	193	25
2020年6月25日 定時株主総会決議	193	25

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、社会的責任を果たし、継続的な成長、発展を目指すために、コーポレート・ガバナンスを充実させることが重要な経営上の課題であることを認識し、諸策を講じている。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

- ・当社は、監査役制度を採用している。物流専門家という事業の性格及び規模から取締役は社外取締役2名を含む8名とし、監査役は常勤監査役1名、社外監査役2名の計3名で構成しており、迅速な経営判断と相互監視及び適正な監査を行う体制を敷いている。
- ・当社は、業務執行の責任体制を明確化し、迅速、且つ効率的な業務執行を図るため、執行役員制度を導入している。
- ・当社は、経営に関する迅速な意思の決定、情報交換等を行うため、取締役会、監査役会のほか、経営会議、執行役員会及び全国支店長会議を定期的開催している。

取締役会は、取締役8名（うち2名は社外取締役）で構成しており、議長は代表取締役原匡史である（構成員の氏名については、「(2) 役員の状況 役員一覧」に記載）。

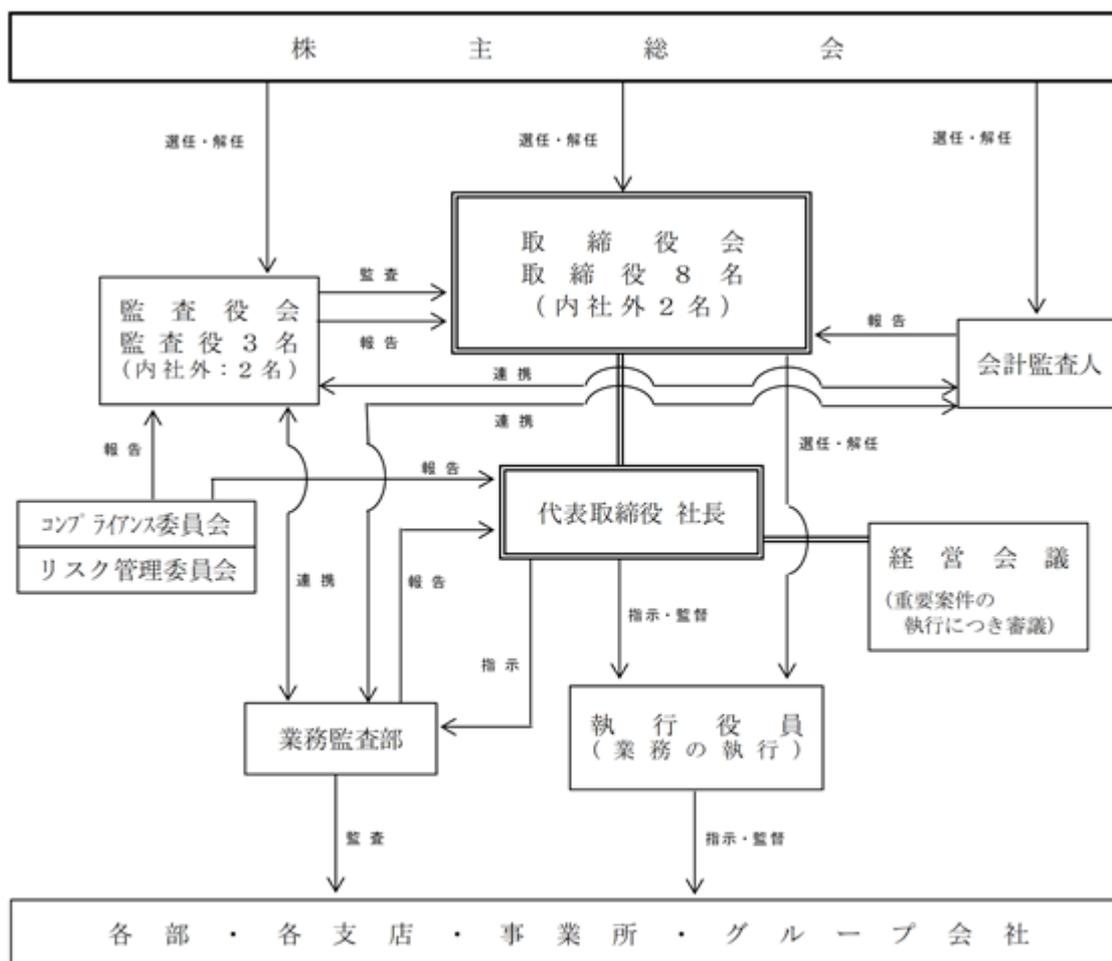
監査役会は、監査役3名（うち2名は社外監査役）で構成しており、議長は常勤監査役高沢由二である（構成員の氏名については、「(2) 役員の状況 役員一覧」に記載）。

経営会議は、業務執行上の重要事項について協議している。

執行役員会は、経営方針の徹底、業務遂行状況の確認、情報交換等を行っている。

- ・コーポレート・ガバナンスを図表で表すと次のとおりである（構成員の氏名については、後記記載の役員一覧を参照）。

（会社の機関・内部統制関係図）



企業統治に関するその他の事項

当社は「経営理念」を経営の拠りどころとし、日常の行動においては「行動の指針」を実践し、健全な姿で持続的に発展していく会社を目指している。

そのために、内部統制システム構築の基本方針を次のとおりとした。

一．当社の取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

ア．コンプライアンス全体を統括する組織として、社長を委員長とする「コンプライアンス委員会」を設置し、コンプライアンスを最重要課題の一つとして職務の執行に当たるよう教育、指導を徹底する。

イ．コンプライアンス委員会の活動については、取締役会、監査役会に報告する。

ウ．コンプライアンス委員会に下部組織を設置し、当社のコンプライアンスについて教育、指導を推進する。

二．当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役会、経営会議、執行役員会等の議事録及び職務執行に関する重要な稟議書等の文書は、法令及び当社の文書規程に基づいて管理、保存する。

三．当社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

ア．事業上のあらゆるリスクに対処し、リスク全般を統括する組織として、社長を委員長とする「リスク管理委員会」を設置し、予防対策及び有事の対策を講じる。

イ．リスク管理委員会に下部組織を設置し、迅速に当社のリスクを把握して、対策等を講じる。

ウ．特に人命尊重、安全の確保には重点を置き、「全社ゼロ災推進本部」「支店ゼロ災推進本部」を設置し、ゼロ災活動を強化する。

四．当社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

ア．当社は、経営の効率化を図り、コーポレート・ガバナンスを強化するため、執行役員制度を導入している。取締役会は迅速な意思決定と経営の監督を掌ることとし、取締役会の決定に基づき執行役員が業務執行を迅速且つ効率的に行っていく。

イ．毎月定例の取締役会のほか、必要に応じて取締役会を開催して迅速に意思決定し、機動的に業務を執行する体制とする。

ウ．経営会議を定期的で開催して、業務執行上の重要課題について掘り下げて議論し、戦略を練る。

エ．執行役員会及び全国支店長会議を定期的で開催し、業務執行状況を確認するとともに経営方針の徹底を図る。

五．当社の使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

ア．使用人の職務の執行に当たっては、会社職制規程、職務分掌規程に従って責任体制、担当範囲を明確にする。

イ．内部監査として業務監査部が定期的に業務監査を実施し、各業務の適法性について監査する。

ウ．コンプライアンス委員会が、随時コンプライアンスについて教育、広報を行う。

エ．「行動の指針」を実践し、関係法令、社会のルールを遵守することを徹底する。

六．当社グループにおける業務の適正を確保するための体制

ア．当社のコンプライアンス委員会が当社グループのコンプライアンスを統括し、推進していくとともに、子会社各社にコンプライアンス推進責任者を置き、子会社各社のコンプライアンスを推進する。

イ．子会社各社の経営については、その自主性を尊重しつつ担当執行役員が管理を行い、重要案件については事前協議を実施する。また、定期的に関係会社社長会を開催し、業務執行状況の報告を求める。

ウ．当社のリスク管理委員会が当社グループのリスク管理体制を推進していくとともに、子会社各社にリスク管理推進責任者を置き、子会社各社のリスク管理を推進する。

エ．当社の業務監査部が定期的に子会社各社の業務監査を実施し、適法性について監査する。

オ．当社の監査役と子会社各社の監査役が当社グループの業務の適正を図るための連携を図る。

カ．子会社各社の重要事項に関しては、社内規程に従い、当社の取締役会又は社長が承認する。

七．監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項

監査役から補助すべき使用人を必要とする旨申し出があった場合は、監査役と協議して補助すべき使用人を業務監査部の要員の中から選任する。

八．監査役を補助すべき使用人の取締役からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

ア．監査役を補助すべき使用人の人事異動、人事考課等は、監査役と協議して行う。

イ．当該使用人は監査役の指揮命令に従う。

九．当社グループの取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

ア．当社グループの取締役は、会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実があることを発見したときは、法令及び社内規程に定める方法等に従い、直ちに監査役に報告する。

イ．当社グループの取締役又は使用人は、業務執行に関する重要事項について監査役に報告する。

ウ．上記ア・イ．の報告をした者に対して、当該報告をしたことを理由として不利益な取扱いをしない。

エ．当社の業務監査部は、当社グループの業務監査の結果を監査役に報告する。

オ．当社グループの監査役はグループ監査役会議を開催し、情報を共有する。

十．その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- ア．監査役は、当社グループの主要な稟議書及び業務執行に関する重要な文書を閲覧し、必要に応じて取締役又は使用人から説明を求めることができる。
- イ．常勤監査役は取締役会のほか経営会議、執行役員会及び全国支店長会議をはじめ重要な会議に出席する。
- ウ．監査役は、会計監査人から会計監査の内容について説明を受けるとともに、情報の交換を行い連携を図る。
- エ．監査役は、業務監査部及び子会社の監査役と連携を図りながら監査を行う。
- オ．監査役会は、定期的に社長と面談し、意見の交換を行う。
- カ．当社は、監査役の職務の執行に係る費用等について、当該監査役の職務の執行に必要でないことを証明した場合を除き、速やかにこれを支払う。

十一．反社会的勢力排除に関する事項

当社グループは、企業の社会的責任を十分認識し、社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体に対しては、法令に則し毅然とした態度で対応する。

十二．責任限定契約

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定による責任限定契約を締結している。その契約の内容の概要は次のとおりである。

- ・社外取締役又は社外監査役が任務を怠ったことによって当社に損害賠償責任を負う場合は、法令が規定する最低責任限度額を限度として、その責任を負う。
- ・上記の責任限定が認められるのは、当該社外取締役または社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失がないときに限るものとする。

十三．取締役の定員

当社は、「当会社に、取締役10名以内を置く。」旨定款に定めている。

十四．取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、「議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもってこれを行う。」旨定款に定めている。

十五．取締役会で決議できる株主総会決議事項

当社は、自己株式の取得について、会社法第165条第2項の規定により、市場取引などにより自己株式を取得することができる旨を定款で定めている。また、当社は中間配当について、会社法454条第5項の規定により、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当ができる旨を定款で定めている。

十六．株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項の定めによる株主総会の特別決議要件について、「議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもってこれを行う。」旨定款に定めている。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものである。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性 11名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期 (年)	所有株式数 (千株)
代表取締役社長	原 匡史	1959年11月12日生	1985年4月 当社入社 2009年6月 執行役員経営企画部長 2010年6月 取締役執行役員業務部長兼営業部、 経営企画部担当 2013年4月 取締役常務執行役員業務部長兼港運部長 兼営業部、青果営業部、国際営業部担当 2014年4月 代表取締役社長(現任)	1	14
取締役 安全・品質管理部長 総務部 経理部 情報システム部 業務監査部管掌	萩原 卓郎	1959年9月15日生	1982年4月 当社入社 2009年6月 執行役員経理部長 2010年6月 取締役執行役員経理部長 兼情報システム部、施設部担当 2014年4月 取締役執行役員経理部長 兼情報システム部担当 2015年4月 取締役常務執行役員経理部長 2020年4月 取締役常務執行役員 安全・品質管理部長、総務部、経理部、 情報システム部、業務監査部管掌 (現任)	1	4
取締役 川崎支店長 兼港運部長	西 修一	1961年1月16日生	1986年11月 当社入社 2010年6月 執行役員志布志支店長 2014年4月 執行役員川崎支店長 2014年6月 取締役執行役員川崎支店長 2016年4月 取締役執行役員川崎支店長 港運部管掌、担当 2017年4月 取締役常務執行役員川崎支店長 兼港運部長(現任)	1	3
取締役 大阪支店長 九州地区統括	山口 哲生	1957年7月20日生	1981年4月 当社入社 2010年6月 執行役員博多支店長 2013年4月 執行役員大阪支店長 2014年6月 取締役執行役員大阪支店長 2016年9月 取締役執行役員大阪支店長、 九州地区統括 2019年4月 取締役執行役員大阪支店長 2020年4月 取締役常務執行役員大阪支店長、 九州地区統括(現任)	1	3
取締役 東扇島支店長 倉庫・運輸統括	鈴木 康司	1960年1月23日生	1982年4月 当社入社 2013年4月 執行役員博多支店長 2015年4月 執行役員東扇島支店長、 京浜地区倉庫・運輸統括 2016年6月 取締役執行役員東扇島支店長、 京浜地区倉庫・運輸統括 2018年4月 取締役執行役員東扇島支店長、 倉庫・運輸統括、鹿島支店管掌 2019年4月 取締役執行役員東扇島支店長、 倉庫・運輸統括(現任)	1	3

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期 (年)	所有株式数 (千株)
取締役 業務部長 青果営業部 経営企画部 国際営業部管掌	三上 慎治	1965年3月21日生	1987年4月 当社入社 2014年4月 執行役員青果営業部長 兼川崎支店青果部長 2015年1月 執行役員青果営業部長 兼川崎支店青果部長兼大井事業所長 2016年4月 執行役員青果営業部長 兼川崎支店青果部長 2017年6月 取締役執行役員青果営業部長 兼川崎支店青果部長 2018年4月 取締役執行役員業務部長、青果営業部、 経営企画部、国際営業部管掌(現任)	1	2
取締役	堀 尚義	1946年7月10日生	1969年4月 株式会社東光コンサルタンツ入社 1992年11月 同社取締役本社事業部副事業部長 1997年11月 同社常務取締役本社事業部長 1998年8月 同社代表取締役社長(現任) 2015年6月 当社取締役(現任)	1	-
取締役	田中 明夫	1956年7月14日生	1979年4月 第一生命保険相互会社入社 2008年4月 同社執行役員西日本営業本部長 兼九州営業局長 2010年4月 第一生命保険株式会社執行役員 西日本営業本部長兼九州営業局長 2012年4月 同社常務執行役員西日本営業本部長 兼西日本営業局長 2013年4月 同社常務執行役員名古屋総局長 2015年4月 同社常務執行役員中部総局長 2018年4月 日本物産株式会社代表取締役社長 (現任) 2019年6月 当社取締役(現任) 2019年6月 大和自動車交通株式会社社外取締役 (現任)	1	-
監査役 (常勤)	高沢 由二	1948年12月13日生	1972年4月 当社入社 1999年6月 大阪支店長 2002年6月 取締役大阪支店長 2005年6月 取締役執行役員大阪支店長 2006年6月 取締役常務執行役員大阪支店長 2008年6月 常務執行役員東京支店長 2010年6月 常務執行役員鹿島支店長 2015年4月 顧問 2015年6月 常勤監査役(現任)	(注)3	8
監査役	吉野 保則	1953年8月18日生	1985年10月 太田昭和監査法人 (現EY新日本有限責任監査法人)入所 2000年5月 監査法人太田昭和センチュリー (現EY新日本有限責任監査法人)社員 (現パートナー) 2006年5月 新日本監査法人 (現EY新日本有限責任監査法人) 代表社員(現シニアパートナー) 2014年6月 同法人退所 2015年6月 株式会社ファルテック社外監査役 (現任) 2015年6月 当社監査役(現任)	(注)3	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期 (年)	所有株式数 (千株)
監査役	山本 博毅	1968年3月12日生	1998年4月 弁護士登録 1998年4月 原・竹下法律事務所 (現原合同法律事務所)入所 2009年4月 原合同法律事務所にパートナー (社員弁護士)として参加(現任) 2012年2月 ユニオンツール株式会社社外監査役 2014年2月 同社社外取締役(現任) 2019年6月 当社監査役(現任)	(注)3	-
計					40

- (注) 1. 取締役 堀尚義及び取締役 田中明夫は、社外取締役である。
 2. 監査役 吉野保則及び監査役 山本博毅は、社外監査役である。
 3. 2019年6月26日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
 4. 「所有株式数」の欄には、当社役員持株会名義の株式を含んでいない。
 5. 当社は執行役員制度を導入している。執行役員は11名で、上記の取締役兼任者の他の執行役員は次のとおりである。
 坂本 啓則 執行役員情報システム部長
 大野 武一 執行役員経理部長
 地曳 高士 執行役員東京支店長
 原田 弘之 執行役員鹿島支店長
 渡辺 忠弘 執行役員総務部長
 富永 超 執行役員志布志支店長
6. 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任している。
 補欠監査役の略歴は次のとおりである。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
竹下 正己	1946年12月17日生	1971年7月 弁護士登録 1971年7月 原秀男法律事務所(現原合同法律事務所) 入所 2009年4月 原合同法律事務所代表(現任)	-

社外役員の状況

- ・当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名である。
- ・社外取締役堀尚義は、当社を取り巻く経営環境を深く理解し経営者としての豊富な経験と高い見識に基づき、適宜意見を述べており、社外取締役として適任である。また、当社の株主である株式会社東光コンサルタツの代表取締役社長であるが、利害関係はなく、同社との取引は通常の取引関係である。
- ・社外取締役田中明夫は、経営者としての豊富な経験と高い見識を有していることから、社外取締役として適任である。また、当社の株主である第一生命保険株式会社の常務執行役員の経験があり、日本物産株式会社の代表取締役社長であるが、当社との資本的関係、利害関係はない。また、同社との取引は通常の取引関係である。
- ・社外取締役田中明夫は、大和自動車交通株式会社の社外取締役である。当社と同社との間には特別の関係はない。
- ・社外監査役吉野保則は、公認会計士の資格を有しており、会社財務・法務に精通し、会社経営を統治する十分な見識を有していることから、公正且つ客観的な監査に寄与しており、社外監査役として適任である。また、公認会計士であるが、当社とは一切の取引関係はなく、資本的関係、利害関係はない。
- ・社外監査役山本博毅は、弁護士として会社法務に精通し、会社経営を統治する十分な見識を有していることから社外監査役として適任である。現任する原合同法律事務所と当社の取引は通常の取引関係であり、資本的関係、利害関係はない。
- ・社外監査役山本博毅は、ユニオンツール株式会社の社外取締役である。当社と同社との間には特別の関係はない。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

- ・社外監査役は、会計監査人から監査計画概要書により、監査計画・監査手続き及び監査目標について説明を受け、意見の交換を行っている。
- ・社外監査役は、会計監査人と往査時或いは随時会合を持ち、監査に関する報告を受け、意見の交換を行っている。
- ・社外監査役は、会計監査人から連結会計年度末に監査実施報告書の提出を受けるとともに、説明を受けている。
- ・社外監査役は、内部監査部門である業務監査部から年間の監査計画について説明を受け、意見の交換を行っている。
- ・社外監査役は、業務監査部から定時（年2回）及び随時、監査状況及び結果の報告を聴取している。
- ・監査役は、会計監査人から、監査計画・監査手続きについて説明を受け、また、往査時或いは随時会合を持ち、監査に関する報告を受け、意見の交換を行っている。
- ・監査役は、当連結会計年度末に、監査実施に関する説明書の提出及び説明を受けている。
- ・当社は下記内容の社外役員の独立性判断基準を設けている。

社外取締役、社外監査役（以下、社外役員）候補者の選任にあたっては、東京証券取引所の定める独立性の要件を充足するとともに、当社における社外役員候補者は、原則として、以下のいずれの要件にも該当しないものとする。

- 一．当社及び当社の子会社（以下、当社グループ）の業務執行者（ 1 ）
 - 二．主要な取引先（ 2 ）
 - ・当社グループを主要な取引先とする者（ 3 ）、もしくはその者が法人等である場合は、その業務執行者
 - ・当社グループの主要な取引先（ 3 ）、もしくはその者が法人等である場合はその業務執行者
 - ・当社の資金調達において必要不可欠であり、代替性がない程度に依存している金融機関等の業務執行者
 - 三．専門家（ 2 ）
 - ・当社グループから役員報酬以外に、多額の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計専門家、または法律専門家
 - ・当社グループから、多額の金銭その他の財産を得ている法律事務所、会計事務所、コンサルティング会社等の専門サービスを提供する法人等の一員
 - 四．寄付
当社グループから多額の寄付等を受けるものもしくはその業務執行者
 - 五．主要株主
当社の主要株主、もしくは主要株主が法人等である場合はその業務執行者
 - 六．近親者
次に掲げるいずれかの者（重要でない者を除く）の近親者（配偶者または二親等以内の親族）
 - ・上記（一）～（五）に該当する者
 - ・当社グループの取締役、監査役、執行役員または使用人
- （ 1 ）過去10事業年度において該当する者をいう。
（ 2 ）過去1事業年度において該当する者をいう。
（ 3 ）当社グループとの取引が当該会社の存続や当社グループの業務に重大な影響を与える者をいう。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当社における監査役監査は定例の監査役会のほか、必要に応じて随時監査役会を開催している。監査役は取締役会など、重要な会議に出席し意見を述べるほか、年間監査計画に基づいて当社及び当社グループ各社の監査を行っている。また、業務監査部及び会計監査人と随時情報交換や意見交換を行うなど、監査の効率化と監査機能の向上を図っている。

監査役会は、常勤監査役1名、社外監査役2名、合計3名で構成されている。

なお、常勤監査役高沢由二は、当社の取締役の経験があり、当社業務に精通しているほか通算13年にわたり支店長として決算手続きなど、収支業務に従事し財務及び会計に関する相当程度の知見を有している。社外監査役吉野保則は、公認会計士の資格を有しており、社外監査役山本博毅は、弁護士資格を有している。

当事業年度において当社は監査役会を年10回開催しており、個々の監査役の出席状況については次のとおりである。

氏名	開催回数	出席回数
高沢 由二	10	10
吉野 保則	10	10
山本 博毅	7	7

監査役会の主な検討事項として、監査計画に関する件、会計監査人に関する件、業務監査に関する件、内部統制に関する件、株主総会に関する件、コンプライアンス及びリスクに関する件などがある。

また、常勤監査役の活動として取締役会のほか、経営会議、執行役員会、全国支店長会議、コンプライアンス委員会、リスク管理委員会など、重要な会議及び委員会に出席している。加えて、グループ会社の監査役とグループ監査役会議を開くなど、活動を行っている。

内部監査の状況

- ・当社は業務監査部（9名、内兼務5名）を設け、当社グループ全体の業務執行における適法性、企業倫理の監査等を行い、コンプライアンスの徹底を図っている。
- ・監査役は、業務監査部から年間の監査計画について説明を受け、意見の交換を行っている。また、定時（年2回）及び随時、監査状況及び結果の報告を聴取している。

会計監査の状況

当社はEY新日本有限責任監査法人を会計監査人に選任しており、会計監査人は年間会計監査計画に基づき、当社、連結子会社及び持分法適用会社の監査を行っている。

業務を執行した公認会計士の氏名	監査業務補助者の構成	所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員 成田 智弘	公認会計士 5名	EY新日本有限責任監査法人
指定有限責任社員 業務執行社員 江下 聖	その他 10名	

（注）業務を執行した公認会計士の継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略している。

・継続監査期間

1962年以降

・監査法人の選定方針と理由

当社の監査役会が所持している会計監査人の評価基準に基づいて選定することを方針とし、今年度の監査業務について評価検討した結果、適正に業務が遂行されたと判断している。

・監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人に対して評価を行っている。この評価については、当該監査法人が過去に行政処分を発せられたことに対して、特に業務品質の管理状況に注視したが、品質管理面については問題はないと評価している。

・会計監査人の解任又は不再任の決定の方針

監査役会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定している。

また、監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任する。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告している。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	35	-	35	-
連結子会社	-	-	-	-
計	35	-	35	-

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク（アーンスト・アンド・ヤング・グローバル・リミテッド）に属する組織に対する報酬

該当事項なし。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項なし。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針は、監査対象事業年度の監査予定時間を基礎として計算した見積報酬額の提示及び説明を受け、妥当性を検討及び協議した結果、最終的に経営者が決定している。なお、監査報酬の決定については、会社法第399条に基づき監査役会の同意を得ている。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積り等の算出根拠について過去の監査実績及び報酬の推移に照らして検討を加えた結果、会計監査人の報酬等について、会社法第399条第1項の同意を行っている。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

取締役の報酬（月額上限額）は1982年6月29日開催の株主総会で決議され、取締役の定員は2004年6月29日開催の株主総会で決議されている。監査役の報酬（月額上限額）及び定員は1994年6月29日開催の株主総会で決議されている。

取締役の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する決定権限を有する者は取締役会であり、社外取締役からは経営に関する重要事項として適切な関与、助言を得ている。また、各取締役の報酬は、役位に応じた一定の額を基準に、業績等を勘案し加減して決定する方針である。各監査役の報酬等の額又はその算定方法は監査役の協議により決定している。

当事業年度における取締役の報酬等の額の決定については、2019年3月26日及び2019年6月26日開催の取締役会で決議され、監査役の報酬等の額の決定についても2019年6月26日の監査役会で協議し決定している。

なお、役員退職慰労金制度については、2005年3月28日の取締役会において廃止を決議している。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額（百万円）	報酬等の種類別の総額（百万円）		対象となる役員の員数（人）
		固定報酬	業績連動報酬	
取締役 （社外取締役を除く。）	131	131	-	6
監査役 （社外監査役を除く。）	19	19	-	1
社外役員	16	16	-	5

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資以外の目的である投資株式の区分について、純投資目的である投資株式は、専ら株式の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とした投資株式とし、純投資以外の目的である投資株式は、取引関係の維持・強化・開拓等の保有目的の合理性を満たす投資株式としている。

投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社の成長に必要なかどうか、配当率と当社の加重平均資本コストや借入金利率を参考に、他に有効な資金活用はないか等の観点で取締役会で個別の検証を行い、保有の合理性を検証している。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	36	420
非上場株式以外の株式	29	3,713

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	5	取引関係の強化のため購入した。
非上場株式以外の株式	3	16	取引関係の強化のため購入した。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項なし。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
ショーボンドホール ディングス(株)	138,800	69,400	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。な お、同社は2019年7月の株式分割により 株式が増加している。	有
	599	512		
(株)みずほフィナン シャルグループ	4,298,120	4,298,120	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	531	736		
(株)三菱UFJフィナ ンシャル・グループ	1,198,460	1,198,460	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	482	659		
豊田通商(株)	146,521	146,521	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	373	528		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
旭化成(株)	357,602	347,195	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。 取引関係の維持・強化のため、取引先持 株会を通じ、株式を購入した。	無
	273	396		
王子ホールディング ス(株)	422,700	422,700	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	244	290		
日本紙パルプ商事(株)	58,500	58,500	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	220	242		
MS & ADインシュ アランスグループ ホールディングス(株)	66,695	66,695	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	201	224		
太平洋セメント(株)	64,555	64,555	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	119	238		
イーサポートリンク (株)	111,100	111,100	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	88	117		
東京汽船(株)	142,400	142,400	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	84	107		
(株)T & Dホールディ ングス	74,910	74,910	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	66	87		
(株)伊藤園	10,200	10,200	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	58	58		
東亜建設工業(株)	38,000	38,000	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	54	60		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
大成建設(株)	15,400	15,400	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	50	79		
(株)トクヤマ	20,000	20,000	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	41	52		
A G C (株)	14,785	14,785	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	39	57		
木徳神糧(株)	10,000	10,000	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	32	37		
(株)A D E K A	15,862	14,712	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。 取引関係の維持・強化のため、取引先持 株会を通じ、株式を購入した。	無
	21	23		
(株)ミツウロコグルー プホールディングス	17,355	17,355	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	19	14		
双日(株)	68,467	68,467	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	17	26		
住友大阪セメント(株)	5,300	5,300	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	17	23		
阪和興業(株)	10,073	9,231	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。 取引関係の維持・強化のため、取引先持 株会を通じ、株式を購入した。	無
	16	28		
第一生命ホールディ ングス(株)	13,000	13,000	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	16	19		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
北越コーポレーション(株)	29,250	29,250	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	11	18		
三菱マテリアル(株)	4,905	4,905	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	10	14		
(株)伊藤園(第1種 優先株式)	3,060	3,060	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	無
	6	8		
ケイヒン(株)	5,000	5,000	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	5	6		
大興電子通信(株)	8,712	8,712	取引関係の維持・強化 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法で検証を行っている。	有
	5	5		

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	890,000	890,000	退職給付に備えるための信託財産であり、議決権行使に関する指図権限を有している。 定量的な保有効果を記載することは困難 であり、保有の合理性の検証について は、上記の方法に準じた方法で検証を 行っている。	有
	358	489		

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していない。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成している。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成している。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成している。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2019年4月1日から2020年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2019年4月1日から2020年3月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けている。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、開催されるセミナー等に参加している。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2 1,748	2 2,223
受取手形及び営業未収入金	4,045	4,109
原材料及び貯蔵品	162	250
前払費用	106	154
その他	589	551
貸倒引当金	0	3
流動資産合計	6,652	7,285
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	2 52,820	2 52,913
減価償却累計額	39,534	40,249
建物及び構築物(純額)	2 13,285	2 12,664
機械及び装置	3 20,751	3 20,622
減価償却累計額	18,156	18,011
機械及び装置(純額)	2,594	2,611
船舶及び車両運搬具	1,156	1,210
減価償却累計額	1,080	1,102
船舶及び車両運搬具(純額)	76	107
工具、器具及び備品	965	943
減価償却累計額	878	842
工具、器具及び備品(純額)	86	100
土地	2 8,461	2 8,461
リース資産	65	113
減価償却累計額	38	46
リース資産(純額)	27	67
建設仮勘定	0	0
有形固定資産合計	24,532	24,013
無形固定資産		
リース資産	1	1
その他	122	118
無形固定資産合計	124	119
投資その他の資産		
投資有価証券	1, 2 5,693	1, 2 4,734
長期貸付金	88	33
繰延税金資産	358	635
その他	1,447	1,477
貸倒引当金	26	29
投資その他の資産合計	7,561	6,852
固定資産合計	32,217	30,985
資産合計	38,869	38,271

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
負債の部		
流動負債		
営業未払金	3,036	3,080
短期借入金	2,513	2,537
リース債務	12	21
未払金	811	882
未払法人税等	139	378
設備関係支払手形	822	657
その他	1,052	1,000
流動負債合計	11,011	11,396
固定負債		
長期借入金	2,546	2,443
リース債務	16	48
退職給付に係る負債	1,910	1,966
役員退職慰労引当金	8	8
資産除去債務	55	55
その他	149	142
固定負債合計	7,687	6,657
負債合計	18,698	18,054
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,260	8,260
資本剰余金	5,181	5,181
利益剰余金	5,528	6,394
自己株式	61	62
株主資本合計	18,909	19,775
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1,322	556
為替換算調整勘定	164	147
退職給付に係る調整累計額	318	370
その他の包括利益累計額合計	1,169	333
非支配株主持分	92	107
純資産合計	20,171	20,217
負債純資産合計	38,869	38,271

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業収入	34,132	34,731
営業原価	30,678	31,397
営業総利益	3,453	3,333
販売費及び一般管理費	1,1728	1,1876
営業利益	1,725	1,457
営業外収益		
受取利息	2	2
受取配当金	152	174
受取地代家賃	89	86
持分法による投資利益	-	7
為替差益	-	18
その他	149	99
営業外収益合計	393	390
営業外費用		
支払利息	122	112
持分法による投資損失	25	-
為替差損	47	-
その他	12	7
営業外費用合計	207	120
経常利益	1,911	1,727
特別利益		
固定資産売却益	216	24
投資有価証券売却益	33	-
受取保険金	-	3517
受取補償金	-	4166
特別利益合計	49	688
特別損失		
固定資産除却損	5106	5273
火災による損失	-	6354
特別損失合計	106	628
税金等調整前当期純利益	1,854	1,787
法人税、住民税及び事業税	413	543
法人税等調整額	178	23
法人税等合計	592	519
当期純利益	1,262	1,268
非支配株主に帰属する当期純利益	10	15
親会社株主に帰属する当期純利益	1,251	1,252

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
当期純利益	1,262	1,268
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	385	760
為替換算調整勘定	39	16
退職給付に係る調整額	140	51
持分法適用会社に対する持分相当額	10	7
その他の包括利益合計	496	836
包括利益	765	431
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	755	416
非支配株主に係る包括利益	10	15

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,260	5,181	4,663	61	18,044
当期変動額					
剰余金の配当			386		386
親会社株主に帰属する当期純利益			1,251		1,251
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	865	0	864
当期末残高	8,260	5,181	5,528	61	18,909

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	1,715	127	178	1,665	81	19,792
当期変動額						
剰余金の配当						386
親会社株主に帰属する当期純利益						1,251
自己株式の取得						0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	393	37	140	496	10	485
当期変動額合計	393	37	140	496	10	379
当期末残高	1,322	164	318	1,169	92	20,171

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	8,260	5,181	5,528	61	18,909
当期変動額					
剰余金の配当			386		386
親会社株主に帰属する当期純利益			1,252		1,252
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	866	0	865
当期末残高	8,260	5,181	6,394	62	19,775

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	1,322	164	318	1,169	92	20,171
当期変動額						
剰余金の配当						386
親会社株主に帰属する当期純利益						1,252
自己株式の取得						0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	766	17	51	835	15	820
当期変動額合計	766	17	51	835	15	45
当期末残高	556	147	370	333	107	20,217

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,854	1,787
減価償却費	1,648	1,674
業務システム開発中止に伴う損失引当金の増減額 (は減少)	225	-
引当金の増減額 (は減少)	18	5
退職給付に係る負債の増減額 (は減少)	118	93
受取保険金	-	517
受取補償金	-	166
固定資産処分損益 (は益)	90	269
借地権利金償却額	18	18
火災による損失	-	354
投資有価証券売却損益 (は益)	33	-
受取利息及び受取配当金	154	177
支払利息	122	112
持分法による投資損益 (は益)	25	7
売上債権の増減額 (は増加)	70	61
仕入債務の増減額 (は減少)	32	29
その他	254	315
小計	3,227	3,100
利息及び配当金の受取額	167	192
利息の支払額	121	115
補償金の受取額	-	166
保険金の受取額	-	517
法人税等の支払額	841	318
その他	230	-
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,202	3,542
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	450	450
定期預金の払戻による収入	450	450
固定資産の取得による支出	1,882	1,714
固定資産の売却による収入	16	4
固定資産の除却による支出	81	76
資産除去債務の履行による支出	6	-
投資有価証券の取得による支出	47	23
投資有価証券の売却による収入	59	-
貸付けによる支出	762	621
貸付金の回収による収入	666	650
投資活動によるキャッシュ・フロー	2,037	1,780
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (は減少)	197	97
長期借入れによる収入	2,163	950
長期借入金の返済による支出	2,253	1,936
自己株式の取得による支出	0	0
配当金の支払額	388	382
リース債務の返済による支出	14	22
財務活動によるキャッシュ・フロー	297	1,294
現金及び現金同等物に係る換算差額	14	7
現金及び現金同等物の増減額 (は減少)	147	474
現金及び現金同等物の期首残高	1,495	1,348
現金及び現金同等物の期末残高	1,348	1,823

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社

(株)東洋埠頭青果センター

(株)東洋トランス

東京東洋埠頭(株)

鹿島東洋埠頭(株)

志布志東洋埠頭(株)

東永運輸(株)

〇〇〇東洋トランス

〇〇〇TB東洋トランス 8社

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社

東光ターミナル(株)

(株)ティーエフ大阪

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、いずれも小規模であり、非連結子会社の連結会社との債権と債務、取引等の消去後の総資産及び売上高、連結会社との取引による資産に含まれる未実現損益の消去前の当期純損益のうち持分に見合う額及び利益剰余金等のうち持分に見合う額はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないので連結の範囲から除いた。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用会社

東光ターミナル(株) (非連結子会社)

坂出東洋埠頭(株) (関連会社)

(株)オーエスティ物流 (")

新潟東洋埠頭(株) (")

上海青旅東洋物流有限公司 (") 5社

(2) 主要な持分法非適用会社

非連結子会社 (株)ティーエフ大阪

(3) 持分法非適用の非連結子会社及び関連会社はそれぞれ当期純損益及び利益剰余金等(持分に見合う額)からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、全体としても重要性がないので持分法を適用していない。

(4) 持分法適用会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社については、当該会社の会計年度に係る財務諸表を使用している。ただし、連結決算日との間の、重要な取引については、必要な調整を行っている。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち〇〇〇東洋トランス、〇〇〇TB東洋トランスの決算日は12月31日である。連結財務諸表の作成に当たっては、12月31日現在の財務諸表を使用している。

なお、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っている。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

たな卸資産

原材料及び貯蔵品

個別法による原価法(貸借対照表価額は、収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定率法。ただし、1998年4月1日以降取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法。

なお、主な耐用年数は以下のとおりである。

建物及び構築物 2～65年

機械及び装置 2～15年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用している。

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上している。

役員賞与引当金

役員賞与の支出に備えるため、支出見積額を計上することとしたが、当連結会計年度は支出しないこととしたため計上していない。

役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に充てるため、内規に基づく支出見積額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については期間定額基準によっている。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により、発生した連結会計年度の翌連結会計年度から費用処理し、過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により、発生した連結会計年度から費用処理することとしている。

(5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理している。また、在外連結子会社の資産及び負債は当該子会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は、期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上している。持分法適用の在外関連会社の資産、負債、収益及び費用は、当該関連会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上している。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっている。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理の方法

消費税等の会計処理の方法は、税抜方式を採用している。

連結納税制度の適用

連結納税制度を適用している。

連結納税制度からグループ通算制度への移行に係る税効果会計の適用

当社及び一部の国内連結子会社は、「所得税法等の一部を改正する法律」（令和2年法律第8号）において創設されたグループ通算制度への移行及びグループ通算制度への移行にあわせて単体納税制度の見直しが行われた項目については、「連結納税制度からグループ通算制度への移行に係る税効果会計の適用に関する取扱い」（実務対応報告第39号 2020年3月31日）第3項の取扱いにより、「税効果会計に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第28号 2018年2月16日）第44項の定めを適用せず、繰延税金資産及び繰延税金負債の額について、改正前の税法の規定に基づいている。

（未適用の会計基準等）

・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日 企業会計基準委員会）

- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 2020年3月31日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」（IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606）を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものである。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされている。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用する。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中である。

- ・「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「棚卸資産の評価に関する会計基準」（企業会計基準第9号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）が、公正価値測定についてほぼ同じ内容の詳細なガイダンス（国際財務報告基準（IFRS）においてはIFRS第13号「公正価値測定」、米国会計基準においてはAccounting Standards CodificationのTopic 820「公正価値測定」）を定めている状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、主に金融商品の時価に関するガイダンス及び開示に関して、日本基準を国際的な会計基準との整合性を図る取組みが行われ、「時価の算定に関する会計基準」等が公表されたものである。

企業会計基準委員会の時価の算定に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、統一的な算定方法を用いることにより、国内外の企業間における財務諸表の比較可能性を向上させる観点から、IFRS第13号の定めを基本的にすべて取り入れることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮し、財務諸表間の比較可能性を大きく損なわせない範囲で、個別項目に対するその他の取扱いを定めることとされている。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用する。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で未定である。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症（以下、本感染症）の拡大は、国内外の経済、企業活動に広範な影響を与える事象であり、本感染症拡大の収束時期や影響の程度を予測することは困難であるが、外部の情報源や各拠点の稼働状況等を踏まえて、今後、2021年3月期通期において当該影響が継続するものと仮定し、局所的な荷動きの低迷等を考慮した上で、固定資産の減損判定や繰延税金資産の回収可能性などの会計上の見積りを実施している。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
投資有価証券(株式)	518百万円	525百万円

2 担保資産及び担保付債務

(1) 担保に供している資産は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
建物及び構築物	1,162百万円	1,095百万円
土地	454	454
投資有価証券	2,334	2,043
計	3,952	3,593

(2) 担保付債務は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
短期借入金	1,425百万円	1,634百万円
長期借入金	4,333	3,649

(3) 上記物件の他、営業債務に対する金融機関からの債務保証の担保として前連結会計年度は定期預金50百万円、当連結会計年度は定期預金50百万円を担保に供している。

3 圧縮記帳額

国庫補助金により有形固定資産の取得価額から控除している圧縮記帳額及びその内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
圧縮記帳額	179百万円	179百万円
(うち、機械及び装置)	179	179

4 保証債務

連結会社は、下記の連結会社以外の会社の金融機関からの借入金に対し、債務保証を行っている。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
(株)ティーエフ大阪	31百万円	(株)ティーエフ大阪 18百万円

5 偶発債務

前連結会計年度(2019年3月31日)

該当事項なし。

当連結会計年度(2020年3月31日)

(当社川崎支店の火災について)

当社川崎支店において、2019年4月16日にベルトコンベアから火災事故が発生し、近隣の施設に延焼した。

この火災事故について将来金銭的負担が生じる可能性があるが、現時点では連結財務諸表に与える影響額を合理的に見積もることは困難な状況である。

なお、火災で焼失した当社の設備等に係る損失、それに伴う受取保険金は連結財務諸表に計上している。

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
人件費	1,189百万円	1,216百万円
退職給付費用	16	58

2 前連結会計年度は機械及び装置等の売却によるものであり、当連結会計年度においては船舶及び車両運搬具等の売却によるものである。

3 当社川崎支店において発生した火災に伴う保険金である。

4 賃貸借契約終了に伴う補償金である。

5 前連結会計年度は機械及び装置等の除却、撤去費用であり、当連結会計年度においては建物及び構築物等の除却、撤去費用である。

6 当社川崎支店において発生した火災による損失であり、その内訳は設備等の固定資産滅失損失及び撤去費用である。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	522百万円	989百万円
組替調整額	33	-
税効果調整前	555	989
税効果額	170	228
その他有価証券評価差額金	385	760
為替換算調整勘定：		
当期発生額	39	16
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	199	112
組替調整額	2	37
税効果調整前	201	74
税効果額	61	22
退職給付に係る調整額	140	51
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	10	7
その他の包括利益合計	496	836

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	7,740,000	-	-	7,740,000
合計	7,740,000	-	-	7,740,000
自己株式				
普通株式	36,954	483	-	37,437
合計	36,954	483	-	37,437

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加483株は、単元未満株式の買取りによる取得である。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当 額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	193	25	2018年3月31日	2018年6月28日
2018年11月1日 取締役会	普通株式	193	25	2018年9月30日	2018年11月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	193	利益剰余金	25	2019年3月31日	2019年6月27日

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	7,740,000	-	-	7,740,000
合計	7,740,000	-	-	7,740,000
自己株式				
普通株式	37,437	191	-	37,628
合計	37,437	191	-	37,628

（注） 普通株式の自己株式の株式数の増加191株は、単元未満株式の買取りによる取得である。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当 額（円）	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	193	25	2019年3月31日	2019年6月27日
2019年10月31日 取締役会	普通株式	193	25	2019年9月30日	2019年11月29日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度末日後となるもの

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり配 当額（円）	基準日	効力発生日
2020年6月25日 定時株主総会	普通株式	193	利益剰余金	25	2020年3月31日	2020年6月26日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）	当連結会計年度 （自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）
現金及び預金勘定	1,748百万円	2,223百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	400	400
現金及び現金同等物	1,348	1,823

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(借主側)

リース資産の内容

有形固定資産

主として、事務機器(工具、器具及び備品)である。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりである。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(借主側)

(単位: 百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
1年内	3	2
1年超	7	4
合計	10	7

(貸主側)

(単位: 百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
1年内	302	302
1年超	2,573	2,270
合計	2,875	2,573

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社及び一部の連結子会社は、設備投資計画に照らして、必要な設備資金を主に金融機関からの借入により調達している。当社は、一時的な余資の運用は元本を毀損する恐れのない預金等に限定し、また、短期的な運転資金については不足額を銀行借入により調達している。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び営業未収入金は、顧客の信用リスクに晒されている。また、海外との取引にあたり生じる外貨建ての債権債務は、為替の変動リスクに晒されている。

投資有価証券である株式は、主に当社グループと取引関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されている。

営業未払金、未払金及び設備関係支払手形は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。

借入金は、主に設備投資に必要な資金の調達を目的にしたものであり償還日は決算日後最長で9年後である。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社及び外部売上比率の高い連結子会社は与信管理規程に従い、営業債権について、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行い、財務状況等の悪化等による回収懸念債権の早期把握や貸倒リスクの軽減を図っている。

市場リスク(金利等の変動リスク)の管理

当社は、長期借入金については、金融収支の安定性を重視し、金融機関から長期固定金利の借入により調達している。

投資有価証券については、定期的に時価を把握し、市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部署からの報告に基づき担当部署が適時に資金繰計画を作成・更新するとともに、取引金融機関との当座貸越契約の締結、月中の資金変動見込額を上回る手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理している。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれていない（（注）2 参照）。

前連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	1,748	1,748	-
(2) 受取手形及び営業未収入金	4,045	4,045	-
(3) 投資有価証券			
その他有価証券	4,754	4,754	-
資産計	10,548	10,548	-
(1) 営業未払金	3,036	3,036	-
(2) 短期借入金	5,136	5,136	-
(3) 未払金	811	811	-
(4) 未払法人税等	139	139	-
(5) 設備関係支払手形	822	822	-
(6) 長期借入金	5,546	5,580	33
負債計	15,492	15,526	33

当連結会計年度（2020年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	2,223	2,223	-
(2) 受取手形及び営業未収入金	4,109	4,109	-
(3) 投資有価証券			
その他有価証券	3,783	3,783	-
資産計	10,115	10,115	-
(1) 営業未払金	3,080	3,080	-
(2) 短期借入金	5,374	5,374	-
(3) 未払金	882	882	-
(4) 未払法人税等	378	378	-
(5) 設備関係支払手形	657	657	-
(6) 長期借入金	4,436	4,426	9
負債計	14,810	14,800	9

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項
資産

(1) 現金及び預金、並びに(2) 受取手形及び営業未収入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっている。

なお、有価証券は其他有価証券として保有している。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」を参照。

負債

(1) 営業未払金、(2) 短期借入金、(3) 未払金、(4) 未払法人税等並びに(5) 設備関係支払手形

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(6) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっている。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
非上場株式	939	951

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 投資有価証券 其他有価証券」には含めていない。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	1,745
受取手形及び営業未収入金	4,045
投資有価証券 其他有価証券のうち満期があるもの	-
合計	5,790

当連結会計年度(2020年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	2,218
受取手形及び営業未収入金	4,109
投資有価証券 其他有価証券のうち満期があるもの	-
合計	6,327

4. 長期借入金及びその他有利子負債の連結決算日後の返済予定額
 前連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	3,200	-	-	-	-	-
長期借入金	1,936	1,898	1,046	1,480	608	513
合計	5,136	1,898	1,046	1,480	608	513

当連結会計年度(2020年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	3,314	-	-	-	-	-
長期借入金	2,060	1,224	1,658	786	385	381
合計	5,374	1,224	1,658	786	385	381

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	4,083	2,259	1,824
	(2) 債券	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	4,083	2,259	1,824
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	670	677	6
	(2) 債券	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	670	677	6
合計		4,754	2,936	1,817

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額420百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

当連結会計年度(2020年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額(百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	2,307	1,181	1,126
	(2) 債券	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	2,307	1,181	1,126
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	1,475	1,772	297
	(2) 債券	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	1,475	1,772	297
合計		3,783	2,954	828

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額425百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	59	33	-
合計	59	33	-

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

該当事項はない。

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はない。

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

該当事項はない。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、当連結会計年度末現在、確定給付型の制度として、退職一時金制度を7社が有している。

また、当社は、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を設けている。

2. 確定給付制度(簡便法を適用した制度を除く。)

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,765百万円	1,801百万円
勤務費用	85	85
利息費用	5	5
数理計算上の差異の発生額	71	17
退職給付の支払額	126	108
退職給付債務の期末残高	1,801	1,768

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
年金資産の期首残高	621百万円	504百万円
期待運用収益	15	18
数理計算上の差異の発生額	128	129
退職給付の支払額	0	29
その他	2	3
年金資産の期末残高	504	360

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	1,801百万円	1,768百万円
年金資産	504	360
	1,297	1,407
非積立型制度の退職給付債務	-	-
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,297	1,407
退職給付に係る負債	1,297	1,407
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,297	1,407

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
勤務費用	85百万円	85百万円
利息費用	5	5
期待運用収益	15	18
数理計算上の差異の費用処理額	3	43
過去勤務費用の費用処理額	6	6
確定給付制度に係る退職給付費用	73	110

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
過去勤務費用	6百万円	6百万円
数理計算上の差異	195	68
合計	201	74

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
未認識過去勤務費用	12百万円	6百万円
未認識数理計算上の差異	470	539
合計	458	533

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
株式	97%	99%
その他	3	1
合計	100	100

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮している。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
割引率	0.3%	0.3%
長期期待運用収益率	2.4%	3.7%
予想昇給率	1.5%	1.6%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	644百万円	613百万円
退職給付費用	46	50
退職給付の支払額	77	104
退職給付に係る負債の期末残高	613	558

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	613百万円	558百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	613	558
退職給付に係る負債	613	558
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	613	558

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度46百万円 当連結会計年度50百万円

4. 確定拠出制度

社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度19百万円、当連結会計年度19百万円である。

(ストック・オプション等関係)

該当事項なし。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の主な発生原因別の内訳

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	930百万円	944百万円
減損損失	600	562
税務上の繰越欠損金(注)	289	334
未払賞与	143	149
その他有価証券評価差額金	2	72
資産除去債務	16	16
その他	217	248
繰延税金資産 小計	2,200	2,328
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	289	334
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	533	505
評価性引当額小計	823	839
繰延税金資産 合計	1,376	1,489
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	502	344
退職給付信託設定益	195	195
買換資産積立金	184	180
固定資産圧縮積立金	135	133
その他	0	0
繰延税金負債 合計	1,018	853
繰延税金資産の純額	358	635

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠 損金(1)	15	31	49	71	81	40	289
評価性引当額	15	31	49	71	81	40	289
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額である。

当連結会計年度(2020年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金(2)	34	54	78	89	20	57	334
評価性引当額	34	54	78	89	20	57	334
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(2)税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額である。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率の差異の主な原因別の内訳

前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。

(賃貸等不動産関係)

当社及び一部の連結子会社では、東京都その他の地域において、賃貸専用物流施設、賃貸住宅、賃貸店舗等を所有している。前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は85百万円(賃貸収入は、営業収入、営業外収益に、主な賃貸費用は、営業原価、販売費及び一般管理費に計上)、固定資産除却損は0百万円(特別損失に計上)である。

当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は70百万円(賃貸収入は、営業収入、営業外収益に、主な賃貸費用は、営業原価、販売費及び一般管理費に計上)、固定資産除却損は0百万円(特別損失に計上)である。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりである。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
連結貸借対照表計上額		
期首残高	929	923
期中増減額	5	8
期末残高	923	915
期末時価	2,422	2,491

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額である。
2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の期中増減額は主に減価償却費の計上によるものであり、当連結会計年度の期中増減額においても主に減価償却費の計上によるものである。
3. 期末の時価は、主要な物件については社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価書に基づく金額、その他の物件については、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標を用いている。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものである。

当社は、当社の各支店及び連結子会社を営業活動の拠点として事業を展開している。

したがって当社は、当社の各支店及び連結子会社を基礎としたセグメントから構成されており、各セグメントの事業内容や特徴等を勘案して集約した国内での倉庫業、港湾運送業、自動車運送業等を主なサービスとする「国内総合物流事業」、国際輸送業、海外での倉庫業、通関業等を主なサービスとする「国際物流事業」を報告セグメントとしている。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一である。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値である。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいている。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自2018年4月1日 至2019年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			調整額 (注)1	連結財務諸 表計上額
	国内総合 物流事業	国際物流 事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	31,165	2,967	34,132	-	34,132
セグメント間の内部売上高又は振替高	111	163	274	274	-
計	31,276	3,130	34,407	274	34,132
セグメント利益	1,598	116	1,715	10	1,725
セグメント資産	38,359	487	38,847	22	38,869
その他の項目					
減価償却費	1,645	3	1,648	-	1,648
持分法適用会社への投資額	435	35	470	-	470
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,950	4	1,955	-	1,955

(注)1. 調整額は、セグメント間取引消去である。

2. セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸 表計上額
	国内総合 物流事業	国際物流 事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	31,434	3,297	34,731	-	34,731
セグメント間の内部売上高又は振替高	85	205	291	291	-
計	31,519	3,503	35,022	291	34,731
セグメント利益	1,308	138	1,447	10	1,457
セグメント資産	37,629	584	38,214	56	38,271
その他の項目					
減価償却費	1,670	3	1,674	-	1,674
持分法適用会社への投資額	437	40	478	-	478
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,609	8	1,617	-	1,617

(注) 1. 調整額は、セグメント間取引消去である。

2. セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

【関連情報】

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えているため、記載を省略している。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えているため、記載を省略している。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

該当事項なし。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

該当事項なし。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

該当事項なし。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

該当事項なし。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
関連会社	(株)オーエ スティ物流	大阪市 此花区	30	自動車運 送業 倉庫業	直接 49.0	役員の兼任 資金の貸借 業務の委託	運転資金 の貸付	531	長期貸付金	68

(注) 1. 当社は(株)オーエスティ物流に運転資金の不足額を貸付けるとともに、同社の資金状況に応じて随時返済を受けている。

2. 貸付金の金利は当社が金融機関から借入れている短期借入金の平均金利に準じて決定している。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
関連会社	(株)オーエ スティ物流	大阪市 此花区	30	自動車運 送業 倉庫業	直接 49.0	役員の兼任 資金の貸借 業務の委託	運転資金 の貸付	568	長期貸付金	90

(注) 1. 当社は(株)オーエスティ物流に運転資金の不足額を貸付けるとともに、同社の資金状況に応じて随時返済を受けている。

2. 貸付金の金利は当社が金融機関から借入れている短期借入金の平均金利に準じて決定している。

(ウ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

前連結会計年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有)割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員	露木 繁夫	-	-	当社監査役 第一生命 ホールディ ングス(株) 代表取締役 副会長 執行役員	(被所有) -	第一生命 ホールディ ングス(株) 100%子会 社である第 一生命保険 (株)からの資 金の借入	設備資金の 借入	200	長期借入金 (一年以内返済) 長期借入金	100 900

(注) 取引条件及び取引条件の決定方法

上記取引は、いわゆる第三者のための取引であり、資金借入については、市場金利を勘案して借入金利率を合理的に決定している。

なお、資金借入については、投資有価証券391百万円を担保に供している。

当連結会計年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

該当事項なし。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
1株当たり純資産額	2,606.78円	2,610.78円
1株当たり当期純利益金額	162.48円	162.56円

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。
 2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	1,251	1,252
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額(百万円)	1,251	1,252
期中平均株式数(千株)	7,702	7,702

(重要な後発事象)

該当事項なし。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項なし。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	3,200	3,314	0.7	-
1年以内に返済予定の長期借入金	1,936	2,060	1.3	-
1年以内に返済予定のリース債務	12	21	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	5,546	4,436	1.1	2021年～2028年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	16	48	-	2021年～2024年
その他有利子負債	-	-	-	-
合計	10,712	9,881	-	-

(注) 1. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	1,224	1,658	786	385
リース債務	17	14	13	3

2. 平均利率を算定する際の利率及び残高は、期末のものを使用している。

3. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載していない。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略している。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
営業収入(百万円)	9,085	17,754	26,416	34,731
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	263	654	1,058	1,787
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益金額(百万 円)	182	458	738	1,252
1株当たり四半期(当期)純 利益金額(円)	23.64	59.52	95.93	162.56

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	23.64	35.88	36.41	66.63

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2 1,577	2 2,076
受取手形	23	15
営業未収入金	5 3,625	5 3,634
原材料及び貯蔵品	153	241
前払費用	92	135
立替金	5 260	5 260
短期貸付金	5 71	5 39
その他	5 244	5 196
貸倒引当金	0	1
流動資産合計	6,050	6,595
固定資産		
有形固定資産		
建物	1 11,586	1 11,001
構築物	2,429	2,326
機械及び装置	3 2,515	3 2,542
車両運搬具	13	20
工具、器具及び備品	70	84
土地	1 8,480	1 8,480
リース資産	25	66
建設仮勘定	0	0
有形固定資産合計	25,120	24,523
無形固定資産		
ソフトウェア	50	55
港湾等施設利用権	57	48
その他の施設利用権	11	12
リース資産	1	1
無形固定資産合計	122	117
投資その他の資産		
投資有価証券	1 5,091	1 4,133
関係会社株式	311	311
長期貸付金	5 2,002	5 2,018
従業員長期貸付金	4	3
差入保証金	247	259
長期前払費用	763	769
繰延税金資産	-	125
その他	5 64	5 62
貸倒引当金	1,914	1,975
投資その他の資産合計	6,572	5,709
固定資産合計	31,814	30,350
資産合計	37,865	36,946

(単位：百万円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
負債の部		
流動負債		
営業未払金	5 2,742	5 2,827
短期借入金	5 4,026	5 4,166
1年内返済予定の長期借入金	1 1,916	1 2,054
リース債務	11	21
未払金	5 718	5 775
未払費用	398	369
未払法人税等	122	352
預り金	5 95	5 69
設備関係支払手形	822	657
その他	5 177	5 169
流動負債合計	11,032	11,464
固定負債		
長期借入金	1 5,532	1 4,428
リース債務	16	48
退職給付引当金	838	873
資産除去債務	55	55
その他	123	118
繰延税金負債	133	-
固定負債合計	6,699	5,524
負債合計	17,732	16,988
純資産の部		
株主資本		
資本金	8,260	8,260
資本剰余金		
資本準備金	4,276	4,276
その他資本剰余金	905	905
資本剰余金合計	5,181	5,181
利益剰余金		
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	307	303
買換資産積立金	418	408
別途積立金	670	670
繰越利益剰余金	4,041	4,635
利益剰余金合計	5,437	6,016
自己株式	36	36
株主資本合計	18,844	19,422
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	1,288	534
評価・換算差額等合計	1,288	534
純資産合計	20,132	19,957
負債純資産合計	37,865	36,946

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業収入	1 28,896	1 29,138
営業原価	1 26,305	1 26,724
営業総利益	2,591	2,413
販売費及び一般管理費	1, 2 1,151	1, 2 1,263
営業利益	1,439	1,150
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	1 173	1 195
その他	1 287	1 201
営業外収益合計	460	396
営業外費用		
支払利息	1 130	1 121
その他	5	62
営業外費用合計	135	183
経常利益	1,764	1,363
特別利益		
固定資産売却益	3 12	3 2
投資有価証券売却益	33	-
受取保険金	-	4 517
受取補償金	-	5 166
特別利益合計	45	686
特別損失		
固定資産除却損	6 108	6 276
火災による損失	-	7 354
特別損失合計	108	631
税引前当期純利益	1,701	1,418
法人税、住民税及び事業税	353	486
法人税等調整額	168	33
法人税等合計	522	453
当期純利益	1,178	965

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金				利益剰余金合計
					固定資産圧縮積立金	買換資産積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	8,260	4,276	905	5,181	312	428	670	3,233	4,644
当期変動額									
固定資産圧縮積立金の取崩					4			4	-
買換資産積立金の取崩						10		10	-
剰余金の配当								386	386
当期純利益								1,178	1,178
自己株式の取得									
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	-	-	4	10	-	807	792
当期末残高	8,260	4,276	905	5,181	307	418	670	4,041	5,437

	株主資本		評価・換算差額等	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	
当期首残高	35	18,051	1,673	19,725
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩		-		-
買換資産積立金の取崩		-		-
剰余金の配当		386		386
当期純利益		1,178		1,178
自己株式の取得	0	0		0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			385	385
当期変動額合計	0	792	385	406
当期末残高	36	18,844	1,288	20,132

当事業年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金				利益剰余金合計
					固定資産圧縮積立金	買換資産積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	8,260	4,276	905	5,181	307	418	670	4,041	5,437
当期変動額									
固定資産圧縮積立金の取崩					4			4	-
買換資産積立金の取崩						10		10	-
剰余金の配当								386	386
当期純利益								965	965
自己株式の取得									
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	-	-	4	10	-	593	579
当期末残高	8,260	4,276	905	5,181	303	408	670	4,635	6,016

	株主資本		評価・換算差額等	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	
当期首残高	36	18,844	1,288	20,132
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩		-		-
買換資産積立金の取崩		-		-
剰余金の配当		386		386
当期純利益		965		965
自己株式の取得	0	0		0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			754	754
当期変動額合計	0	578	754	175
当期末残高	36	19,422	534	19,957

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

原材料及び貯蔵品

個別法による原価法(貸借対照表価額は、収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

2. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

定率法。ただし、1998年4月1日以降取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法。

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用している。

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法。

3. 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上している。

役員賞与引当金

役員賞与の支出に備えるため、支出見積額を計上することとしているが、当事業年度は支出しないこととしたため計上していない。

退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上している。

なお、数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(14年)による定額法により、発生した事業年度の翌期から費用処理し、過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(14年)による定額法により、発生した事業年度から費用処理することとしている。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理の方法

税抜方式によっている。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症(以下、本感染症)の拡大は、国内外の経済、企業活動に広範な影響を与える事象であり、本感染症拡大の収束時期や影響の程度を予測することは困難であるが、外部の情報源や各拠点の稼働状況等を踏まえて、今後、2021年3月期通期において当該影響が継続するものと仮定し、局所的な荷動きの低迷等を考慮した上で、固定資産の減損判定や繰延税金資産の回収可能性などの会計上の見積りを実施している。

(貸借対照表関係)

1 担保に供している資産及び担保に係る債務

担保に供している資産

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
有形固定資産	1,617百万円	1,550百万円
投資有価証券	2,334	2,043
計	3,952	3,593

担保に係る債務

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
長期借入金(1年以内返済予定額含む)	5,758百万円	5,283百万円

2 関係会社の営業債務に対する金融機関からの債務保証の担保として、前事業年度は定期預金50百万円、当事業年度は定期預金50百万円を担保に供している。

3 圧縮記帳額

国庫補助金により有形固定資産の取得価額から控除している圧縮記帳額及びその内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
圧縮記帳額	179百万円	179百万円
(うち、機械及び装置)	179	179

4 保証債務

次の関係会社について、金融機関からの借入に対し債務保証を行っている。

(1) 債務保証

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
東永運輸(株)	33百万円	東永運輸(株) 13百万円
(株)ティーエフ大阪	31	(株)ティーエフ大阪 18
計	65	計 31

5 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
短期金銭債権	164百万円	136百万円
長期金銭債権	2,028	2,043
短期金銭債務	1,691	1,895

6 偶発債務

前事業年度(2019年3月31日)

該当事項なし。

当事業年度(2020年3月31日)

(川崎支店の火災について)

川崎支店において、2019年4月16日にベルトコンベアから火災事故が発生し、近隣の施設に延焼した。

この火災事故について将来金銭的負担が生じる可能性があるが、現時点では財務諸表に与える影響額を合理的に見積もることは困難な状況である。

なお、火災で焼失した設備等に係る損失、それに伴う受取保険金は財務諸表に計上している。

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
営業収入	748百万円	702百万円
営業費用	5,693	5,921
営業取引以外の取引高	98	105

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度は19%、当事業年度においては18%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度は81%、当事業年度においては82%である。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
役員報酬手当	172百万円	167百万円
従業員給料手当	436	439
退職給付費用	11	51
福利厚生費	136	134
減価償却費	29	31
租税公課	122	130

3 前事業年度は機械及び装置等の売却によるものであり、当事業年度においては車両運搬具等の売却によるものである。

4 川崎支店において発生した火災に伴う保険金である。

5 賃貸借契約終了に伴う補償金である。

6 前事業年度は機械及び装置等の除却、撤去費用であり、当事業年度においては建物等の除却、撤去費用である。

7 川崎支店において発生した火災による損失であり、その内訳は設備等の固定資産減失損失及び撤去費用である。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式153百万円、関連会社株式157百万円、当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式245百万円、関連会社株式66百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の主な発生原因別の内訳

	前事業年度 (2019年 3月31日)	当事業年度 (2020年 3月31日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	608百万円	615百万円
貸倒引当金	585	605
減損損失	323	308
未払賞与	89	88
その他有価証券評価差額金	1	71
資産除去債務	16	16
その他	230	253
繰延税金資産 小計	1,857	1,959
評価性引当額	984	990
繰延税金資産 合計	872	969
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	490	334
退職給付信託設定益	195	195
買換資産積立金	184	180
固定資産圧縮積立金	135	133
その他	0	0
繰延税金負債 合計	1,005	843
繰延税金資産の純額 (は負債)	133	125

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率の差異の主な原因別の内訳

前事業年度 (2019年 3月31日)	当事業年度 (2020年 3月31日)
法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略している。

(重要な後発事象)

該当事項なし。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	期首帳簿価額	当期増加額	当期減少額	当期償却額	期末帳簿価額	減価償却累計額	期末取得原価
有形固定資産	建物	11,586	357	152	789	11,001	32,658	43,660
	構築物	2,429	58	7	154	2,326	7,313	9,639
	機械及び装置	2,515	921	310	583	2,542	17,538	20,080
	車両運搬具	13	27	0	20	20	186	206
	工具、器具及び備品	70	45	0	30	84	772	857
	土地	8,480	-	-	-	8,480	-	8,480
	リース資産	25	58	-	16	66	34	101
	建設仮勘定	0	0	-	-	0	-	0
	計	25,120	1,469	470	1,595	24,523	58,503	83,027
無形固定資産	ソフトウェア	50	24	0	19	55	-	-
	港湾等施設利用権	57	-	-	9	48	-	-
	その他の施設利用権	11	0	0	0	12	-	-
	リース資産	1	-	-	0	1	-	-
	計	122	24	0	29	117	-	-

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは次のとおりである。

機械及び装置	川崎大型荷役機械制御盤更新	184百万円
機械及び装置	大井冷凍設備更新	164
機械及び装置	東扇島コンテナ貨物用荷役機器	151
機械及び装置	川崎冷凍設備更新	82
機械及び装置	志布志コンテナ貨物用荷役機器	56

2. 当期減少額のうち主なものは次のとおりである。

建物	東京加工設備	137百万円
機械及び装置	川崎ベルトコンベア設備	302

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	1,914	66	3	1,977

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	-
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他止むを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載してこれを行う。
株主に対する特典	なし

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株式を有する株主は、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。

1. 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
2. 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
3. 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
4. 単元未満株式の買増しを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はない。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出している。

- (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書
事業年度（第108期）（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）2019年6月26日関東財務局長に提出
- (2) 内部統制報告書及びその添付書類
2019年6月26日関東財務局長に提出
- (3) 臨時報告書
2019年7月2日関東財務局長に提出
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書である。
- (4) 四半期報告書及び確認書
（第109期第1四半期）（自 2019年4月1日 至 2019年6月30日）2019年8月8日関東財務局長に提出
（第109期第2四半期）（自 2019年7月1日 至 2019年9月30日）2019年11月13日関東財務局長に提出
（第109期第3四半期）（自 2019年10月1日 至 2019年12月31日）2020年2月13日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2020年6月25日

東洋埠頭株式会社

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人
東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 成田 智弘 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 江下 聖 印

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている東洋埠頭株式会社の2019年4月1日から2020年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、東洋埠頭株式会社及び連結子会社の2020年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、東洋埠頭株式会社の2020年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、東洋埠頭株式会社が2020年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 . 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管している。
2 . X B R L データは監査の対象には含まれていない。

独立監査人の監査報告書

2020年6月25日

東洋埠頭株式会社

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 成田 智弘 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 江下 聖 印

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている東洋埠頭株式会社の2019年4月1日から2020年3月31日までの第109期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、東洋埠頭株式会社の2020年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 . 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管している。
2 . X B R L データは監査の対象には含まれていない。